

市民タイムス



昭和42年の西穂落雷事故

北アルプスの西穂高岳独標(どひびょう)で昭和42年、集団登山中の松本深志高校の2年生が落雷を受けて11人が死亡した事故で、卒業40年を迎えた当時の同期生たちが一日、現地で追悼登山を行った。事故で重軽傷を負った7人など同期生34人と、現役の山岳部生徒ら計54人が参加して、犠牲者を追悼した。

(小岩井貴之)

深志同期生追悼で登山

独標を仰ぎ見る尾根で黙とうする同期生ら(1日午前11時50分ころ)

△西穂高岳独標落雷事故 昭和42年8月1日、集団登山の松本深志高校2年生46人(うち教師5人)が、北アルプス西穂高岳(2,909m)を登頂。下山途中の午後1時40分ころ、岩稜(いのりよう)の独標(2,701m)で被雷し、生徒11人が死亡、生徒と引率教諭ら13人が重軽傷を負った。学校登山の歴史に残る大惨事となった。

どうのように、前日に上高地から入山した人と、当日に岐阜県側からロープウェーを利用して登つた人が、それぞれ独標を縁香や花を手向けて了。独標を仰ぐ尾根に下りて一緒に追悼式をした。

式の始まった午前11時45分ころに雨が降つたが、朝からの霧は晴れ、周辺の峰々がくっきりと見えた。参加者は全員で黙とうをきさせた後、深志高の校歌と、歌い継がれる祝記念祭歌を歌つた。

校内慰靈碑前で100人が冥福祈る。正さん(59)は諏訪郡富士見町では10年ぶりの追悼登山だ。独標付近で、松本深志高校は1日、敷地内にある慰靈碑・西

の事故は「ひとつの過去」と話しつつ、「でも絶対に忘れられない」と付け加えた。

10月10日、この事故は、事故当時の様子を思い起つた。上高の峰々がくっきりと見えた。参加者は全員で黙とうをきさせようとしているかのように、雷鳴がどろんと響いた。このように、犠牲者たちは感概とともに、悲しみを新たにした。塩谷久保文弘さん(61)が参列への礼を述べた。

「一つめひを哀悼する。一度と悲劇を繰り返さないと誓った。」

穗モニユメント前で、追悼行事を営んだ写真。

遺族や同級生、現役の生徒ら100人以上が碑に花を手向け、事故に遭った生徒たちの冥福を祈り、一度と悲劇を繰り返さないと誓った。

穗モニユメント前で、追悼行事を営んだ写真。

くらの子供たちが、亡くなつた人たちと同じ年齢になつたね」と涙を浮かべ、「生きていることが何より。思いきり好きなことを行つてほしい」と

いた。遭難した学年は卒業から40年の節目を迎え、同級生たちは感慨とともに、悲しみを新たにした。塩谷久保文弘さん(61)は、在籍生の姿を見ながら「ほ

くらの子供たちが、亡くなつた人たちと同じ年齢になつたね」と涙を浮かべ、「生きていることが何より。思いきり好きなことをやりたい」と

願つた。

(高石雅也)

卒業40年独標で鎮魂歌



校内慰靈碑前で100人が冥福祈る。正さん(59)は諏訪郡富士見町では10年ぶりの追悼登山だ。独標付近で、松本深志高校は1日、敷地内にある慰靈碑・西

の事故は「ひとつの過去」と話しつつ、「でも絶対に忘れない」と付け加えた。

10月10日、この事故は、事故当時の様子を思い起つた。上高の峰々がくっきりと見えた。参加者は全員で黙とうをきさせようとしているかのように、雷鳴がどろんと響いた。このように、犠牲者たちは感概とともに、悲しみを新たにした。塩谷久保文弘さん(61)が参列への礼を述べた。

「一つめひを哀悼する。一度と悲劇を繰り返さないと誓った。」

穗モニユメント前で、追悼行事を営んだ写真。

くらの子供たちが、亡くなつた人たちと同じ年齢になつたね」と涙を浮かべ、「生きていることが何より。思いきり好きなことをやりたい」と

いた。遭難した学年は卒業から40年の節目を迎え、同級生たちは感慨とともに、悲しみを新たにした。塩谷久保文弘さん(61)は、在籍生の姿を見ながら「ほ

くらの子供たちが、亡くなつた人たちと同じ年齢になつたね」と涙を浮かべ、「生きていることが何より。思いきり好きなことをやりたい」と

みすず野

校長の藤本光世さんは、長野市篠ノ井にある曹洞宗の寺院「龍眼山円福寺」の住職でもある。この夏、三十六年前に行われた学校登山の道をたどった▼上高地から四時間余をかけて西穂山荘に着いた。翌八月一日の早朝、同山荘を出発、独標を経て、西穂高岳までは三時間の行程だった。頂上には三千分ほどいた。帰りは休憩を挟み、独標には午前十時二十五分に戻った▼OBの小林俊樹さん、独標北斜面で被雷負傷した鈴岡潤一さんたち四人が一緒に歩いた。ティーと合流した。小さな祭壇を作り、白百合を手向け、酒をそそいだ。独標では関係者の別ペーパーと合流した。小林さんの司会で黙とうをききげた▼お盆が過ぎ

てから、藤本さんは遺族宅を訪ね、登山の報告をした。クリスチヤンである遺族の一人から「神は耐えられないような試練を与えない」と聞いた言葉を、二学期の始業式で在校生に伝えた。遺族の心と姿だった▼「西穂落雷事故を胸に刻み、祈り続け、学び取ることが努め」と藤本さん。学校年間行事表の八月一日欄には、昨年から「西穂遭難追悼行事」が書き加えられた。深志は忘れない。

みすず野

三十八年前に高校の教頭だった清水和彦さんは、校長室にいた。時の校長とともに、米国から帰国した生徒を囲んで懇談していた。午後三時ころだった▼農科警察署から連絡が入った。「本日午後、穗高独標付近で落雷のために五名が死亡した、いや、後からの報告だと十名が負傷したとの報があったが、本日の生徒が独標に登ったかどうか」との質問であった▼清水さんはメモで二年生の登山があったことを知り、警察にその旨を伝えた。校長は非常招集をかけた。波乱の教育人生を振り返り、さきに刊行した自叙伝『学びの旅教えの道—戦前・戦中・戦後を生きて』に詳しく記した▼「一切の責

任は私にある。私が命じて行ってもらったのである。先生方はほど苦労さまと申し上げることはない」。教職員にそういって学校を去った校長の言葉である▼西穂高岳独標で、集団登山中の一行が落雷に遭い、生徒一人が亡くなった。母校での慰靈行事や、追悼の登山が行われている。巡る八月一日の記憶として深く刻まれる深志落雷忌。

42年目の独標

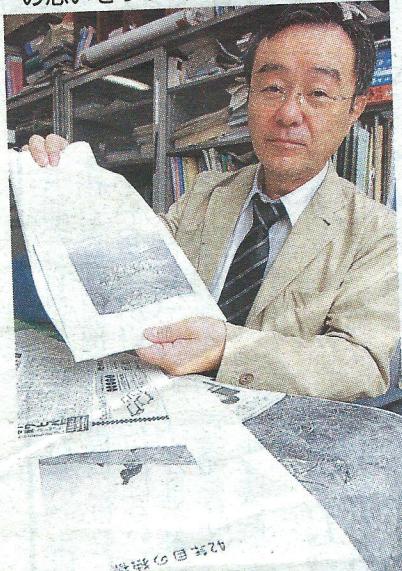
2009



松本深志高校21回生卒業40周年記念事業実行委員会

深志高西穂落雷事故

独標への追悼登山や式典について
の思いをつづった文集を作る



北アルプスの西穂高岳で集団登山中に落雷に遭い、11人の仲間を亡くした松本深志高校の昭和43年度卒業生が、10日に同校で卒業40周年の記念式典を開く。記念事業実行委員会（上条誠一委員長）は、今年8月1日の追悼登山や深志高での追悼式に参加した同期生の思いをまとめた初の文集「42年目の独標（どっぴょう）」を作成しており、記念式典で配る予定だ。文集を通して、同期生それぞれの思いを確認し合う。

（小岩井貴之）

「42年目の独標」に思い

同期生20人と、当時を知る先輩3人が寄稿した。今年の追悼登山や式典をどのような気持ちで迎え、何を感じたか、昭和42年の事故後、どのような思いで生きてきたかなどを、それぞれの立場でつづっている。

当時の登山に参加せず、今年初めて独標に登った。事故を伝えた遠藤豊さん（59）は「仲間の分ほぼ無傷で、西穂山莊へ

（西穂高岳独標落雷事故　昭和42年8月1日午後1時40分ごろ、上高地から入山して集団登山中だった松本深志高校2年生の先発隊46人（うち教師5人）が、北アルプス西穂高岳（標高2,909m）を笠頂後、帰り道にある岩稜（りょう）の独標（標高2,701m）で落雷に遭った。生徒11人が死亡、生徒と引率教諭13人が重傷を負った。）

つたじゅう書柳和比古さん（59）は「山梨県」は「やり残したことは何か」と考えるといつも独標のことが浮かんできました。全国に（追悼登山に参加して）自分としては一つの区切りができた」とつづった。事故に遭遇したが

てきました」と書いた。

今夏の追悼登山後、参加者から「節目となる今年こそ文集を作ろう」との声が上がった。全国に住む同期生に声をかけ、9月上旬までに賛同者が原稿を集めた。編集を担当した深志高教諭の鈴岡潤一さん（59）は「松本市里山辺」は「同期生はみんな、あの事故を通じて生きる意味や命について考えてきた。共感していと常に思い、励みにしてもらえたと思う」と話していた。

同期生が初の文集

文集には今年の追悼登山の写真約20枚も掲載し、A4判50ページ程度になる。300部を印刷し、式典に出席した約170人の同期生に配る予定だ。

42年目の独標

2009



松本深志21回生卒業40周年記念事業実行委員会

目 次

目次

はじめに 上條 誠二	1
青柳 和比古	2
赤羽 和春	3
安藤(丸山)由喜子	3
池原 義明	4
遠藤 豊	5
大久保 晴功	8
太田 知博	8
大西 健文	9
腰原 貞利	10
嶋田 健市	10
白木 建太郎	11
鈴岡 潤一	13
田中 勝人	15
田中 哲三	15
富山(福嶋)素美	16
長森(園里)恵	17
林 純一	18
伴 修次	18
牧野(松本)恵子	19
百瀬(小林)修平	21
森野(半田)由紀	20
小松芳郎(20回)	21
小林俊樹(4回)	22
二木計臣(5回)	25
2007年のこと(『ふかし62号』編集ノートから) 鈴岡潤一	31
資料 目次	32
資料	33~52
編集を終えて	53

はじめに

11年前まだ私が横浜に居た頃、私も誘われて30年ぶりに独標に登った。それは高校2年生の年を含めると4回目の独標であったが、事故直後の2回の追悼登山では感じたことの無い新鮮な気持ち、心の原点に戻ったような落ち着いた気持ち、心が洗われるような不思議な気持ちを味わわせてもらったことをはっきりと覚えている。この事故に対する思いは人それぞれに違うだろう。私だって遠く離れた地で、「あっ、今日は8月1日だったんだ。」と夜になって気づいた年も何回もあったし、常に11人と共に歩んでいるなんて思いはない。ただ、学生生活を含めた若い頃、重要な決断を迫られた時に彼らが背中を押してくれたことは何度かあった。「生き残った自分」という言い方は少し違うだろう、「死くなかった自分」「生きている自分」という思いは、時として大きな支えになっていたことも確かだと思っている。

独標に行けばいつまでも年を取らない彼らに会える。そしておそらく自分も俗世のしがらみを忘れて、真っ新たな気持ちで彼らと向かい合えるのだろうと私は思っている。そんな気持ちを多くの友に味わって欲しい。登りたくてもその機会の無かった人、一人では登る決心がつかなかった人、そんな人達が大勢いるに違いない。そして、10年前の追悼登山と同じように、比較的皆が参加しやすい週末に2009年8月1日は廻って来たのである。千載一遇のチャンスとはのことだろう。天も我々に味方してくれている。そんなオーバーなことではないが、とにかく卒業40周年の年の8月1日は、たくさんのがんばりが重なってどうしても記念事業に組み込みたい日になっていった。

もう一つ企画にあたって大事な伏線があった。それは森山君の呼び掛けで参加した2年前の追悼登山である。地元松本へ戻って初めて参加した追悼登山も、それまでと同様に西穂山荘に1泊するものであったが、松本から参加した私にとっては、前泊ではなく初めての当日泊だったことがそれまでの4回と大きく違っていた。つまり、朝6:30に松本の自宅を出て、その日の11:40には独標に着き、14:20にはまた山荘まで戻っていたのである。この経験は、松本からなら安全に日帰り登山が可能だということを私に教えてくれた。そして、毎年学校の関係者が、上高地から登って西穂山荘に泊まることは知っていたし、その引率を鈴岡さん（2組）がやっていることも分かっていたから、日帰り組の責任を私が持てば記念事業に組み込むことは可能だという目算がたった。学校からは日帰り組も毎年出ていて、こちらの担当を逢沢さん（8組）がやっていることもその後分かり、総ての取りまとめをお二人に任せることができた。

この記録は、そんな形で実現した2009年の追悼登山に参加された皆さんや、母校での慰靈式に参加された皆さんへの想いを、鈴岡さんが呼び掛けてまとめてくれたものである。想いを寄せてくださった皆さんや発行にご助力いただいた皆さんに、心から感謝申し上げる。

平成21年9月23日

卒業40周年記念事業実行委員会 委員長 上條誠二

独標登山への想い

青柳 和比古

42年前の集団登山に親からは「参加したらいいじゃないか」と言われた。しかしこの時、郷友会のキャンプ、常念岳登山があり参加しませんでした。キャンプから帰宅直後に、3時のNHKニュースで「深志高校集団登山の遭難」を知ったときの気持ちは忘ることできません。それ以降36年間、登山から遠ざかっていましたが、50代後半になりやり残した事は何かと考えるといつも独標のことが浮かんできました。4年前より単身赴任の甲府で山梨県内の簡単な山へ登山を始め、独標への想いが強くなってきた折、追悼登山の連絡をもらい全てに優先して行くんだと決め参加させて貰いました。42年経過して初めて独標へ行き慰霊をすることが出来ました。しかし、当日は独標まで雨が降り霧がいっぱい、「なぜもっと早く来てくれなかったの」と言われているようにも感じました。自分としては一つの区切りが出来たと思い、このような機会を計画していただいたことに感謝しています。機会があれば西穂高岳まで登り下山途中の独標を見つめ直してみたいと思います。



赤羽和春

今回の山行は、学生時代に個人的に2度ほど慰霊の意を兼ねて西穂に登って以来でした。

気にはしていたのですが、子供の用事や仕事で長期的な計画が立てられず、西穂は遠いものとなっていました。

40周年行事の一つとして、慰霊登山が計画されているのを知り迷わず申し込みをしました。（山の神には直前までロープウェーの利用を勧められましたが）

現地で当時現場に居合わせた仲間の話を聞き、今まで以上に胸を打たれました。

大変でしたが、行ってこれたと言う実績ができましたので、今後も是非続けたいと思っています。

安藤由喜子

いつかは慰霊に登りたいとずっと思っていました。ようやくその思いを叶えることができました。体力的にも今回参加せねばと思いました。企画していただき有難く思います。

私も子供を亡くして十年がたちます。が、拭いきれない喪失感、心の痛みは続いたまま、むしろ、時を経るにつれ、年をとるにつれ、悲しみは、深いところで大きくなっているようにさえ思います。当時の、そして今に至る御両親様方のそのような思いは如何許りであろうかと、一層御両親様方への思いを深くしております。当初は私たちの姿を見ることさえお辛かったのではと思います。

クラスや授業で共にした、いってしまった友らの顔。一コマ一コマ、思い出す度、つくづく無念なことだと思うのです。

独標は想像以上に険しい場所でした。

「天地碎くるばかり」

悲しみが募りました。



池原義明

卒業40周年の記念同窓会の年であり、記念行事の一環としての西穂慰靈登山を行うと聞いた。

毎年慰靈登山を続けている事は何年か前に聞いてはいたが、仙台に離れていることや仕事のこともあり……、なかなか参加できなかった。今年からは会社での責任も少し軽くなり休暇も取り易くなった事もあって、前日の夜行バスで松本に入り上高地から登るグループに参加することにした。

始めて登った西穂独標はまさに岩稜・岩峰であった。しかし、あの北側の斜面では登山道の横で、這松の脇に何輪かの石楠花の花が咲いているのが印象的であった。この斜面で鈴岡・上島両氏から当時の状況を聞き、またお花畠での追悼式では小林先生のお話などを伺い、大変な事故だったんだと改めて実感した。

あれから42年が経ち、自分たちは卒業40年の記念式典を行う。その節目の年にここに来ることが出来た。改めて11名の冥福を祈るのみである。

仕事柄、上高地から独標に至る間、周辺に出現する地質を見て歩いていた。花崗岩が出現している、途中では焼岳の新期火山の噴出物もかぶっている、西穂山荘周辺はやはり花崗岩だな、アレ、独標とその先西穂にかけての岩稜は柱状節理の発達する安山岩なんだ。そうすると、花崗岩とそれを貫く安山岩、時代は白亜紀から第三紀？、勝手に思い込み、何となく納得して帰ってきた。

これには仙台に戻ってから大きなショックが待っていた。

「穂高の地質ってどうなっているのかな」と思い、地学のガイドブックを見て、？？？。

「ウェストンレリーフから西穂山荘にかけて分布する滝谷花崗閃緑岩は穂高安山岩類に貫入し、190万年前(!?)のもの……。地表に露出する花崗岩類としては世界でもっとも新しい。」とある。えッ！、ボーっと現地で見て思い込んできたこととすっかり逆ではないか、時代もぜんぜん違う。ネットで調べても、どうもその様である。今回は地質調査に出かけた訳ではないが、まるっきり勉強不足だった。反省しきりである。

先日、5万分の1地質図幅「上高地」を手配した。目の前の仕事とは離れたところで少し勉強をしたいと思い、改めて訪れてみたいと思っている。



2009年8月1日 私の追悼登山 飛び入り個人参加

遠藤 豊

学生時代に山岳部に入り、夏は何時も北アルプスのどこかにいたのは、落雷で亡くなられた仲間のそばにいたかったからかもしれない。

その後社会人になり、今までがむしゃらに働いてきて、21回生の同窓会もやっていることを知らずにいたが、2000年にここ Baton Rouge において、偶然にもinternetで30周年記念写真、記事を見て、懐かしく思い、内川さんに直ぐメールして、名簿と30周年記念の写真を送ってもらいました。有難うございます。この名簿に自分の住所がないのには、驚きましたが、出張が多く、引越し等したりして住所不詳になっていたとは残念でした。やっと都合がつき、昨年東京支部会の同窓会に初参加することができました。

Internetの松本深志高校21回生のhome pageをみて毎年8月1日に追悼登山をやっていること知った。

09年は卒業40周年記念同窓会があること、もう59歳になり不整脈という症状が発生するようなになってしまったこと、ここ20年間仕事のベースは米国の工場建設にあり、行ったりきたりの生活となり、なかなか時間がとれないこと等考えると、このチャンスを逃すと2度と登れないだろうと思い、追悼登山をする決心しました。

8月6日成田発で米国への出張が決まっていて、それ以前の出張もあるかもしれないので、40周年記念行事に登録するわけには行かず、個人的参加を決めました。

たまたま兄（67歳）も山歩きをやっているので、西穂山荘の予約、登山計画を立ててもらい、navigatorとなってもらいました。

どうしても落雷事故にあった時と同じルートを辿ってみたくて、上高地、独標、西穂高岳、独標、上高地のコースを計画した。

本当に登れるだろうかと思っていました。体力を付けるため、7月は早朝5時ごろおきジョギングをし、7月の走行距離は133Kmに達した。3週間前には、近くの筑波山に重いリュックをつけて、登り3時間半の走行に耐えられるか試してみた。学生時代と違い、かなりバランスが悪くなっていること、登るための適切な足場を瞬時に判断できなくなっていることに愕然とした。しかしこれが注意する点であること確認できたのは、収穫であった。

7月31日は休暇をとり、朝6時に家を出て、新宿8時発のあずさ5号、久しぶりの中央線は心が弾みます。上高地線、バスと乗り継ぎ、上高地の帝国ホテル前で降りたのが、13時頃でした。それから西穂山荘までの休みなしの登山は正直言ってきつかった。登り始めて直ぐに雨が降り出し、樹木の遠くから発電機のエンジン音を聞いた時は、もう山荘が近い、よくここまで来たもんだとホットした。16:00時に山荘に着いた時、入り口で、鈴岡、池原、上島、赤羽君等がいるのを見て、40年ぶりに会ったせいか、最初は誰だか思い出せなかった。直ぐ後で少しずつ高校時代の記憶、顔が甦り、誰だかわかるようになりました。

旧友に会えた事と、明日の天候が気になり、其の夜はなかなか眠れなかった。ただ横になって休んでいただけでした。大学時代山岳部で、北アルプスを縦走していたころも、テントの中で、ただ横になって体を休めていただけで、次の日の行動が出来ることを経験し

ていたので、ただ体を休めることにした。山荘の布団はありがたい。

落雷に遭わないためには、なるべく午前中に行動を終えることを念頭に、8月1日は朝4時に起き、霧雨のような中、4時40分ごろ山荘を後にして、学生時代に何度も登った事があるが、記憶が全くなくなっていて、独標までもっと緩やかかなと思っていたが、少しきつく、独標の最後の登りは、岩場で、ここで鈴木先生が負傷し倒れていた事が蘇ってきた。確か藤森さん他女性が3人くらいいたと思う。

独標に6時に着いた。ここで思わぬことが起きた。あんなに西穂高岳登山を楽しみにしていた兄が、独標への登りでスリップを経験し、西穂への独標からの急な下りを見て、昨日の雨の影響で岩場が濡れていますと、霧が深く見通しが悪いこと、体力的な疲れ等から西穂高岳登山を断念しここで引き返すと言った。

冗談じゃない。私は1ヶ月前からこの日のためにトレーニングをしてきて、準備万端で来て、体力的にも未だ大丈夫を感じ、この日を逃すと2度とこれなくなる事を考え、私は単独で西穂高岳に行くことにし、兄とここで別れた。

山は天候さえ良ければ、簡単です。しかし一旦急変し悪天候になると、どんな簡単な山でも、遭難死することはある。3週間前に起きた北海道の大雪山系トムラウシ山での遭難死が一例である。兄もこのことが蘇ったと思う。



何があっても遭難しないように、水、食料、衣類等を持ってきたため、リュックも重くなっていた。さすが一人になり西穂側への独標の下りは、リュックが岩に当たり、ふられそうになることもありますと、怖かった。こんな急な、きついところで、落雷にあった仲間は、当然振り落とされてしまっただろうと思いました。

ほとんど霞んでいて、何も見えないが、雨が降らないことが幸いした。気温もそれほど、暑くもなく

く、合羽を着ていたので、下着はびしょ濡れになっていた。

それにしても、大学時代は軽々と行動でき、何処も怖くなかったが、西穂高岳山頂までは、こんなに岩場があるとは、完全に忘れていた。それでも7時に山頂に立つことができ、早速、無事山頂に着いたことを家に電話した。

引き返す途中、ピラミッド・ピークで、腰原、大久保君が休んでいるのに出会った。

独標の登りの手前で、朝ご飯として用意したおにぎりを食べていると、独標の方で、大勢の話し声が聞こえ、深志高校関係者がいることが分かった。

独標の頂上に登る最後の岩場に足をかけ踏ん張ろうとした瞬間、左足が痙攣してしまったが、何とか登り終えた。独標着8時51分。

頂上で高校時代の仲間と話をしながら、1時間くらい過ごした。11時ごろ追悼式を行う

と聞いていたが、今日中に茨城の家に帰るため、ゆっくり出来ない、ここで校歌を口ずさみ、亡くなられた仲間に、黙祷し、別れを告げた。

ここ頂上で、自分が当時倒れた所に、平たい岩があり、助かったが、未だ命の恩人はそこにあるのが、嬉しかった。又落雷の後、上高地側の岩場の影で、神谷君としゃがんで雨が止むのを待とうとしていたのを思いだした。当時どうなっているか、後ろを見に行つた時、仲間が怪我をして動けなくなっていると話したことが記憶に残っているが、誰と話しをしたか覚えていない。

当時、独標の下りで、怪我をしている先生を見て、山荘へ救助を要請に行かなければと思い、藤森さんと、下山した。泣きながら山荘まで走って降りたことを覚えているが、よく走って降りれたものだ。

今回も走れるかなと思い試してみたが、重たいリュックを担いでいたのと、バランス感覚が鈍くなっているせいか、2度ほど転んでしまい。左肩を打ち、上高地への下山中に、左手で支えられないほど痛く、大変だった。

下山中、山荘近くで、追悼登山に参加する日帰り組と出会った。こんなにも沢山参加するんだと驚きました。

山荘で少し休み、下山し上高地に着いたのは、12時前で、まるで遭難当時のように、ちょうど雨が降り出し、雷鳴も聞こえてきた。松本14：40分発のあずさ22号に乗り、自宅に着いたのは19：00になっていた。1泊2日の強行追悼登山でした。

これまで、死にそうになった時が何回かあったが、仲間の分まで生きなければいけないと常に思い、励みにしてきました。

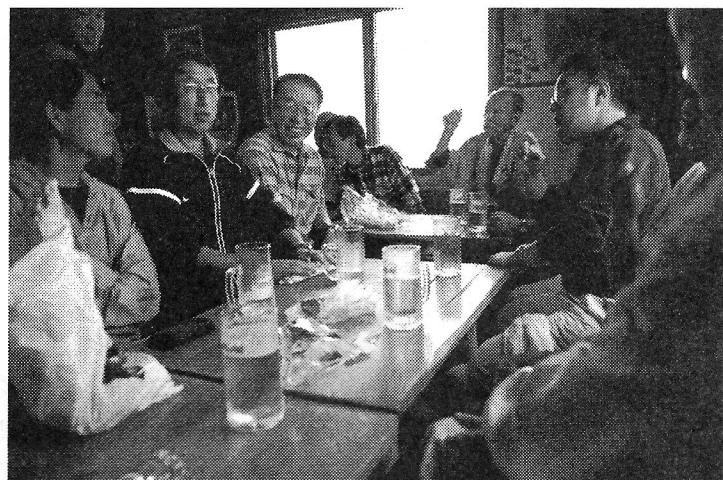
また、あの時伝令に西穂山荘に走ってからは、今までずっと走り続けてきました。

伝令に走った時は、まさかあんな悲惨な事故になっていとは想像も出来ませんでした。

しかも再度救助に向かい、独標の頂上で心臓マッサージ、人口呼吸などずっと続けていたが、ついに戻ってきませんでした。私にとってはとてもショックでした。

このショックは何時までも忘れないが、35年ぶりに追悼登山に行くことができほつとしてます。今後も、もし機会があればまた行きたい。

亡くなられた仲間達、安らかに眠って下さい。



Baton Rouge, Louisiana ,USA にて 8月30日、2009年

大久保晴功

西穂高には、失った青春が甦る感じで、二度と登らないと思っていました。あれから、42年が過ぎサラリーマン人生も残りわずか、子供たちも社会人となり2人とも家をはなれて行き、定年後の人生を悩む日々となりました。

そんな中、2年前の事故の40周忌の時に、腰原、立石、今井君に誘われて7月下旬でしたが、追悼登山をして屈折気味の思いを少し晴らしてきました。この時は、事故の時ほどではなかったのですが、独標は雨と霧の中でした。そこで、再び晴天の西穂へ行きたいという気持ちが芽生えました。

そして、今年の8月1日は土曜日で、深志の追悼登山との合流できることもあり、晴天を期待して、腰原君と私の山仲間の2人と登ることにしました。調布に8時に集合して、車で新穂高温泉へ。ロープウェイ経由で西穂山荘へ。翌日の8月1日に腰原君とは西穂高山頂まで登り、帰りに独標で深志の追悼登山の方々と合流しました。

今年も独標は雨と霧の中に黒く不気味にそびえていました。

独標では、松本からの参加メンバーが次々と登ってくるのを見て感動しました。その後、お花畑で雨中の50名以上と多く仲間と追悼式に初めて参加しました。事故の生き残りとして個人的には、喪失感と虚無感を心のどこかに抱き続けてますが、もっと広い世界で追悼式を毎年開催している関係者。

さらに毎年、独標に登っているという小林先生の姿など印象に残っています。7月31日の夜は、前泊の方々、初めて会った方も多かったのですが深志OBといったことで仲間に入れてもらい、ビールなど飲みながら42年の過ぎ去った日々を想うとともに、もっと前向きに追悼登山に参加できるのだと想いながら、翌日、雨の降り続く山をあとにしました。

今年も天候には恵まれず、晴天の西穂高に登るという課題が残りました。

太田知博

西穂に登りたかった。42年前に登る予定だったが登りそこなった山に、帰らない人となった11人の仲間が踏みしめた登山路を辿って見たかった。

今回同窓の仲間で追悼登山を行うというプランに便乗することができ、ツアーに参加するような気持ちで参加して、無事登ってくることができました。このような機会を提供してくれた人達に感謝いたします。幹事さんどうもありがとうございました。

ひとつ残念なことがあります。独標の事故以来深志では集団登山を行っていないように聞いています。私はこのことを大変残念に思います。希望者には山の素晴らしさを体験させてあげる機会を、是非設けていただきたいと思います。

西穂独標で逝った11人の仲間

大西健文

西穂独標へ登ったのは、これが2回目。1回目は32年前。私が26歳の時だった。新聞記者（信濃毎日新聞）になって、それまで登らなかった西穂独標に「仕事」として登った。8月1日に照準を合わせ、31日に西穂山荘、1日に独標で慰霊登山に来ているはずであろう「誰か」を待った。

西穂山荘では山荘のおやじ村上守さん（いまの山荘経営者は村上さんの孫の文俊さん）に取材した。西穂を知り尽くしているおやじは、私が知らなかつた多くのことを語ってくれた。

その翌日、私は独標で写真を撮るために「追悼する人」を待った。私が独標に着いたときには、誰が供えたのか、花が置かれていた。そうこうしているうちに出会ったのが、毎年、慰霊登山を欠かさない小林俊樹さんだった。当然ながら小林先生も私もまだ若かったころだ。

私は上高地に下りて、32年前の「追悼」を記事にして本社に送ったが、なかなか書けなかつた記憶がある。亡くなった仲間たちのことを思うと、記事を書くことが何を意味するのか。自分自身は何なのか。山荘のおやじの「証言」も重く、その夜はただただ飲み明かした。

事故から40年後の2年前にも登る予定だったが、母に続き父を亡くした直後で、精神的にも肉体的にも余裕がなく、母校での慰霊祭に参加して記事を書いた。あの落雷事故に触れる記事を書くことは、重くつらいものがあったが、11人の仲間であり、記者という仕事を選んだ自分の責任でもあると思った。

卒業40年の節目に、今回の慰霊登山を計画してくれた鈴岡さんらには、深く感謝している。登るなら上高地からと決めていたが、若い時は違い足が動かず、息が切れ、皆さんには迷惑をかけた。

独標では、落雷に遭いけがをした2人から当時の状況を聞いた。生と死を分けた一瞬。現場検証しながら、初めて聞く証言は衝撃的だった。事故によって深い心の傷を負った遺族や引率の先生、そして一緒に登った同期生たち。悪夢のようだった8月1日を忘れられずに生きてきたつらさは、現場にいなかつた私とは大きな開きがあることも、あらためて感じた。

「また登ろう」。60歳の定年が迫った「極楽とんぼ」たち。足腰が元気なうちは、また独標を訪ねたいという思いを胸に、ずぶぬれになりながら上高地を後にした。8月1日は自分自身の「生」を見つめる日もある。



腰原貞利

今年の卒業40周年目の追悼登山には、大久保さんとその仲間の4人で参加しました。前日の夜の西穂山荘では久しぶりに懐かしい顔に出会い、40年前にタイムスリップしたような気持ちになり、楽しい一時を過ごすことができました。

当日は朝早めに出発して、大久保さんと西穂まで登ってきましたが、あいにくの雨で周りはまったく見えなかつたのは残念でした。独標まで戻ってきたら、当日出発組の方々が汗を流しながらぞくぞくと登ってこられました。皆さんと再会した時は何故か胸が熱くなりました。

独標頂上と中腹での追悼式は雨の中で行われましたが、参加した皆さんのがいが伝わってくる追悼式でした。40年毎年のように登ってこられた小林先生のお言葉は重みがありました。

一昨年も8月1日より数日前でしたが、大久保さん、今井さん、立石さんと追悼登山をしました。今年は念願の8月1日に、山上での追悼式に参加することができ、一つの区切りの年でもあり、思い切って来て良かったと思いました。

定年も直ぐそこまで来ていますが、これからは時間が余るようになります。体力が許す限り日々は登ろうと思っています。

今回の企画を中心となって進めて頂いた鈴岡さん、逢沢さんには本当にご苦労様と感謝申しあげる次第です。

嶋田健市

「懐かしい仲間に会う為に西穂独標に登る」、そんな一念を抱いて年齢や最近の生活環境に合わせて自分なりに体調を整え8月1日の登山にそなえました。そして登山当日、西穂独標へ登りながら一生懸命11人の仲間の名前や想い出を思い出しながら登りました。しかしどうしても11人全員の名前や想いでが出てきませんでした。次回の登山には必ず11人全員に会う為に懐かしい想いを思い出しながら再度追悼登山に参加したいと考えております。



独標追悼登山に思う

白木建太郎

独標の標識を見、其処に立った時、込上げる涙を止めることは出来なかった。落雷事故から42年を経過した今、彼らの残酷な運命と無念さに感涙してしまった。42年前の昭和42年8月1日私は学校で剣道の合宿をしていた。私のクラスは2年7組。第1班で西穂高岳の集団登山の最中だった。私は合宿が有ったため、第1班から第2班に変更をお願いしていた。本来ならば落雷事故に会ったメンバーの1人になっている筈であった。合宿も一段落し休憩をしていた時に悲報が学校に入って来た。最初は良く事情が分からなかつたが時間が経つにつれ事の重大さ悲惨さが分かり、一部の生徒はラジオの放送を聞きながら泣いていた事を記憶している。遭難救助にヘリコプターを飛ばし、被災者、遭難者を搬送していた。夕方になると深志高校ではすさまじい雷が鳴り、土砂降りの雨が一時降り事故を暗示している様であった。私は堀江さんの遺体を校庭で受け取り担架で車に乗せた。其の時遺体は損傷が激しく寝袋で覆われていたが、足のあるべき場所には3本の棒のようなものがあった。おそらく千切れていたのだと思った。折井さんの遺体にも面会する事ができたが、残念ながら損傷が激しく顔はミイラのように包帯で包まれていた、最後の別れがこのような状況だという事が残念だった。彼らの死が、まだピンとは来ていなかった。

17～18歳の少年から青年期に移る世代には、精神的にこの事件は微妙に影響していた。

難に会った田近さんは体の何ヶ所も複雑骨折をしていたが、一命は取り止め社会復帰してきた。金子さんは3年生のとき自ら命を絶ってしまった。私も心には何か得体の知れないどんよりとした重苦しさを感じていた。2～3年は引き摺っていたと思う。大学に入り、社会人になり、会社に入り生活に追われた。落雷事故の事は忘れなかったが、記憶から薄れしていく事は確かだった。何回か深志を訪れて参拝をしたが、8月1日は中々難しかった。同窓会に何回か参加したが、同級生も歳と共に人生の深みを増して来ていた。

私は体の元気なうちに必ず彼らの人生を奪った事故現場「独標」に追悼登山をし、この体と心で彼らの（辛い未練が残る）思いを感ずる事を考えていた。年齢も還暦に近くなり、人生の考え方にも少し余力が出てきた。今回の記念追悼登山の企画があることを知り、チャンス到来と心から喜び、申し込みをした。企画者の方々に感謝、感謝だった。

2009年8月1日雨模様の空だったが、高揚した気持ちで朝3時に起き、4時にタクシー、4時30分深志高校、5時に25名と共に新穂高ロープウェイに向かう。7時ごろ到着し、しらかば平駅よりロープウェイで西穂高口駅に向かう。到着後1時間30分ほどトレッキングし、霧の中の西穂山荘に到着した。「先発隊」はすでに登っている。我々「日帰り組」も体制を整え霧・雨交じりの中を独標に向かった。尾根はやはりかなり歩きにくい。久しぶりの登山は足腰に応えた。彼らもこのコースを若さで2時間で往復する予定だったようだが、今の私達ではかなり無理がある事が良く分かった。お花畠で「先発隊」とすれば違って更に進み、11時頃独標に到着した。岩を登って下りて又登っていく。此処で足を滑らせば確実に谷底に落ちていく。助かる事が無い。落雷を受けたらひとたまりも無いことが自分で登った事により体感、実感する事ができた。

なぜか涙が出てくる。止まらない。悲しいという感情なんだろうか？彼らの運命に涙しているのだろうと感じた。私が今ここにいるのも、きっと彼らの短い命の上に更に運命的に頂いた命だろうと感じた。来て良かった。運命とは紙一重であるものだと痛感した。

独標にて御線香を上げ、献花し、彼らの御靈に祈った。最後に校歌を齊唱し、別れを惜しんだ。お花畠では深志の現校長先生、山岳部、同級生、小林先生が、夫々追悼の言葉、お思いを話された。毎年誰かが追悼登山をし、彼らの鎮魂をしてくれていた事は大変うれしかった。ずっといたい気持ちにさせられたが、雨も激しくなり遠く雷の音が聞こえ、全員山荘に引き返し、追悼登山は終了した。

人生とは“人が生きる”と書く。彼らは短い命を彼らなりに、当然悔いはあるだろうが精一杯生きたのではないかと思う。人は喜怒哀楽を感じながら生きている。「人は生きて生かされて生きる」という事が言われている。自分が自分だけでこの世界を生きていると思ったら大間違である。家族、親族、友人、社会そして運命に生かして貰って初めて生きる人生なのだと思う。私は運命的に生かされたと感じ、彼らの分もこれから生きていこうと感じた。“友よ安らかに眠れ”——長年の思いの気持ちの整理が付いた追悼登山であった。

松本に帰ってきたのは17時頃であった。「松本ボンボン」というお祭りというか、催事をしていた。雨交じりの中、世代交代を感じさせる元気さであった。18時より懇親会があり、久しぶりに同窓生の方々と色々な思いを話し合った。楽しい時間を過ごす事ができた。幹事の方々有難うございました。感謝の念で一杯でした。

最後に、私の思いの中には、この集団登山を、学校があの事故の後完全に封印してしまった事に対しては、残念だと思う気持ちが強く有ります。確かに管理上の問題はあったかも知れない。しかし、それを言葉としての教訓として後輩に語り継ぐというだけでは不十分なのではないか。山の気高さ、怖さは、体験して初めて判るものなのではないのか。そうであれば、それを人生の教訓として体験し危機管理もできる後輩を育てる事（登山の再開）が我々の使命ではないかと思われます。どうか今後何かあれば臭い物には蓋でなく、直視し対応できる人材を、深志高校から育んで行けるよう教育関係者の方々にお願いしたいと思います。

私も近々故郷に帰り第3の人生を送りたいと思います、どうか「極楽トンボ21の会」を末永く続けていってください。今回は本当にご苦労様でした。有難うございました。



西穂に今年も登れたということ

鈴岡潤一

今年も無事に降りてこられた……。それが最近数年の実感である。体力の衰えは年を経るごとにはっきりしてきている。山荘到着までの所要時間が年々長くなっている。

なぜ、登るのだろう。

最初に登ったのは、1980年である。恥ずかしい話だが、そのとき私は13回忌のつもりで登ったのである。実際は一年ずれている。おぼろげで、もう少し前の11回忌ころだったよう記憶していたが、先日、小林俊樹先生に確かめると、そのとき先生に同行した現役生（34回）が一人居て、年次として間違いなさそうである。そのほかには当時の深志高校教員である百瀬康雄先生（23回）と、小林先生の山仲間でもある岡沢祐吉さん（4回）もご一緒だった。誘われるままに翌日は西穂を越えて天狗のコルから岳沢を下り、今はなくなってしまった岳沢小屋に泊っている。奇遇はあって、その数年後に裏銀座を生徒と槍ヶ岳を目指して歩いているときに、逆コースを雲の平に向かう岡沢さんとすれ違っている。

その間は諏訪時代にもう一度登り、このときには若き斎藤金司先生（11回）と出会っている。松本に異動になってからは、この14年毎年登っていることになる。

独標とは私にとってなんだろうか。

約30年前に再訪した独標では、無性に涙が流れて、声が出ず、「祝記念祭歌」はうまく歌えなかった。自分が倒れていた独標北側の鞍部に立ち、改めて倒れた場所の幸運を思った。小口先生と岡島君の間に居てそれで済んだのは本当に奇跡的なことである、とその後もそこに立つたびに思う。

雷撃は私の背から入り足指の爪の成長能力に損傷を与えており、結婚後の子どもの誕生に際しても、実はひそかに「本当にまともに生まれてくれるのだろうか」と心配しておいた。だから、生まれたばかりの子どもの小さい手と華奢な指がとてもおしく感じられたことを鮮明に思い出せる。無事に生まれたその長男が17歳になろうとした年次の始めに、「親父と同じ歳になったから西穂に行く」と言い出したときにはとても驚き、またうれしかった。次男もそれに続いた。こうした家族たちが居ることに、また彼らが西穂をどこかで意識していることに、そして今ここにともに生きていられることに、改めて静かな感動を覚える。

思うに、独標が私を誘うのは、そこがたぶん私の第三の誕生の地だからである。その地に立つと、亡くなった彼らの顔が浮かんでくる。一緒に汗を流した柔道部の仲間や、講座が一緒によく話した君が、やはりそこに居るのである。一応は年相応に「自分らしく生きよう」というくらいの「第二の誕生」を経た（と思っている）青春時代の会話が、——会話そのものではないが、生意気だっただろう当時の我々の会話の雰囲気が、いつまでも歳を取らない彼らの顔とともに、ひょいっと浮かんでくることもある。

当時、二年生になった頃の私は、存在論的に悩んでいた。クラブ活動で体を壊し、どうしたものかと、郷友会を共有しつつ同じクラブの先輩に相談したつもりだったのだが、彼は「クラブの存在を認めるのか、認めないのか」といった。先輩のその一言がある意味でその後の私を決めたのかもしれない。私は、「そうだ。問題は存在そのものなのだ。」な

どと短絡したのである。とりあえずは進級したものの、学ぶことそのものが思うような自信につながらず、なにができるのか、何をしたいと思えているのか、要するにお前は何者なのか、という類の煩悶が私を襲っていたのである。文学青年だった田村吉司君とは、山に登ることについて、そんな風な会話をした覚えがあるので。そうした煩悶を抱えて私は西穂に登ることを希望した。登りきることは、「風立ちぬ いざ生きめやも」だった。ある意味の自己確認の場所が私にとっての西穂・独標だった。

落雷の瞬間は私には記憶がない。倒れた北側の最低鞍部上を流れる冷たい雨水に背中を洗われ、着ていたビニールのポンチョに当たる雹の音のなかで目覚めた。横内先生や上條君、中村君に保護されながら、独標の北側のほんの少し上がった場所に坐ってぼんやりしていた。寒さに震えながら、随分長い時間そこにいた。何を感じ、なにを考えていたのかは思い出せない。死者が出る状況に直面したことと、ともあれ私はいま生きているのだということを時間の経過とともに実感したのだろうと思う。時間の経過は、雨が上がり西の空が真っ赤に染まったことが示している。——これも記憶の改変かもしれないあまり自信がなかったが、先日の山上で、みなが「夕焼け」を口にしたので、ようやくにして、確信がもてた。

こうしたことを思い出してみると、西穂・独標とは、私にとっては、11人の彼らが今もそこにいる場所なのである。それも、当時のままの彼らがそこにいるのである。だから、時には「何やってるんだ、お前」という罵声であったり、「しっかりしろよ」という励ましであったりする。

近年、一緒に登る仲間が増えた。33回忌のときに、10人ほどが集まってからは、毎年のように顔を合わせる仲間ができた。だから、近年は山に来る意味がもうひとつ増えた。「おい、あんたも一年元気に過ごしたんだな。うれしいな。また来年も会おうよ。」もちろん、これは11人の仲間たちにもかける言葉である。



西穂独標への追悼登山

田中 勝人

追悼登山に参加したのは、今回が初めてであった。西穂独標まで行って11人の御靈に哀悼の意を表したいと思いつつ、40年以上の歳月が流れてしまった。

高2の夏の学年登山に私も申し込んだ。1, 2, 4, 6, 7組は前班、3, 5, 8, 9組は後班に分けられ、私は後班となり難を逃れた。落雷による死などを誰が予想したであろうか。しかも、生死を分けた理由があまりにも偶然すぎた。亡くなった11人は、不運としか言いようがなかった。また、現場に居合わせて、重傷を負った学友や卒業が遅れた学友など、死と隣り合わせになった学友のことを想うと、私のような立場の人間があれこれと書き綴ることにためらいを感じる。

初めて参加した追悼登山は、あいにくの天候であった。独標周辺の道は、降りしきる雨のせいもあり、歳を重ねた私には険しい道に感じられた。独標では、自然に涙が出てきた。青春のまっただ中で亡くなった彼らの無念さを想うと、慰めるべき言葉が見つからなかつた。また来るよ、と語るのがせいぜいであった。彼らは、この道をものともせずに、西穂の頂上を極め、しっかりと大地を踏みしめて折り返していたことであろう。その場に佇んで、私は彼らの冥福を祈るばかりであった。

今回は自然の厳しさを実感した追悼登山であったが、今度は、自然の別の顔を期待したい。そして、彼らには、もう少し語りかけることができればと思っている。

田中哲三

今年は、卒業40周年の呼びかけで多くの21回生が山に登った。まだ現役の人、リタイアした人、様々な立場で様々な人がいた。でもみんな、みんなのことを忘れずに42年後のここに登ってき

た。御靈は間違いない慰撫されたと思う。合掌。



追悼登山に参加して

富山 素美

今年の3月末、36年間の教員生活にピリオドを打ち、義母の介護に生活の重点を移した私は、「追悼登山」へのお誘いを頂いたとき、直ぐに参加を決めました。「いつかは独標へ追悼登山に行かなければ」という思いはずっと持っていましたが、なかなか近づきがたい思いもあり、このお誘いには本当に感謝しています。

40年前とはいえ、あの日に続く出来事は強烈に覚えています。特に1年生の時に同じクラスで親しく話をした田村洋一さん、折井博親さん。変わり果てた姿で帰ってきた体育館での対面。その日の深志の上に鳴り響いたカミナリの怖さ。田村君のお家に伺ってお線香をあげたとき、かえって私たちにねぎらいのことばをかけてくれたお母様……。

あの日は、演劇部の合宿で、登山は諦めて練習に参加していました。でも、その年のとんぼ祭をどうするのか、練習していた戯曲は「みんな我が子」。母親に息子の死を伝える場面がでてくる……。やっていいのか？ 遺族の方々はどう思われるのか……。みんなで何回も話し合ったことなど思い出します。

今回、山好きの夫と二人で参加しました。夫は「独標に祈る」の熱心な読者で、今回の追悼登山へ是非同行したいと付いてきてくれました。教員でしたので、児童を引率して登山する事もあり、その立場からも何回も手にとって読んでいました。いつも本棚のすぐ手に取れる所に置いてあり、仲間に貸したりもしたので、本は背表紙がぼろぼろになってしまいました。（今は実家の父が修理してくれるというので松本の家にあります。）「学校登山の歴史に残る大惨事」と言われる事故を、短期間でここまで一冊の本にまとめて総括した先生方の血のにじむような努力に思いをはせながら、涙なしには読み進められない「独標に祈る」。今回追悼登山に参加するにあたって改めて、亡くなった11人のページを開き、お名前と写真、それまでの人生、遺族の方々の思いを読んで胸に刻み、登山に參加しました。

息子二人を連れ家族4人で、夏休みには尾瀬、那須岳、白馬、立山…、と登っていましたが、この15年くらいはハイキング程度の山行しかしていなかったので少し不安はありました。でも、不思議と心配だった膝の痛みも出ず、急な岩場にしがみついて一歩一歩登った先の西穂独標は思い描いていた以上にす



ごい所でした。ここでカミナリに遭ったのだ……！！西穂へとまるでカミソリの刃のように冷たく続く稜線と、岐阜県側と長野県側の崖下を独標の上からこわごわのぞきこみ、「安らかに眠ってくださいね」と呼びかけました。久しぶりの同期のみなさんとの再会。それぞれが40年の年を経てこうして同じ目的で一緒に行動した今回の追悼登山。私も長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。鈴岡さんはじめ、実行委員会のみなさん、高橋校長先生、現役の山岳部のみなさん、本当にありがとうございました。

長森 恵

仕事の関係で昨年より長野市に在住。「母親の単身赴任」も10年程となる。

あの時以後、独標には数回登っているが、8月1日には行かねばという気持ちには強いものがあり、今年の案内があり、単独で直行することをすぐ決めた。

その後、逢沢さんと連絡を取り、当日は本隊と合流することができた。当初より、悪天候は予想されたが、どしゃぶりになんでも行く様子の逢沢さんの言葉が心地よかった。

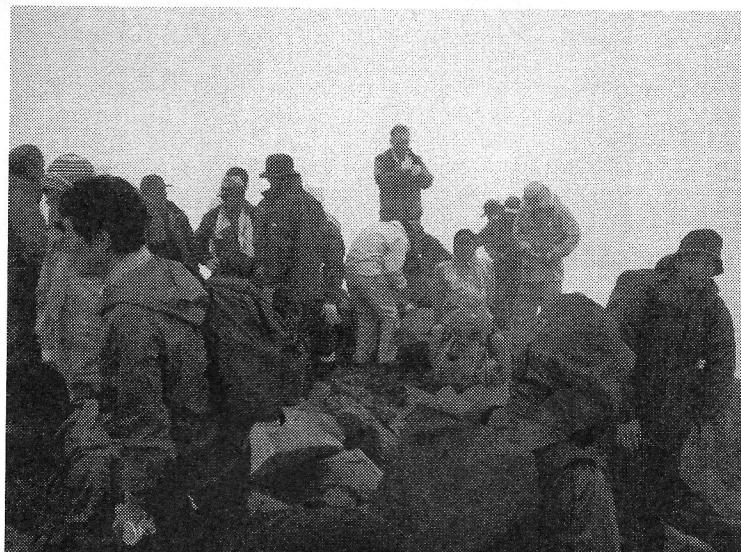
40年前のあの日のことは、思い出すということではなく、いろんなことが鮮明に脳の中にある。私はバテ、西穂山荘で本隊を待っていた。すごい雨となり、山荘に皆避難をしている中、柳原先生が、すごい勢いで駆け込んで来られ救助を訴えた。皆が登っていました。柳原先生も来た道を即、折り返し登っていかれた。その駆け下り駆け上っていた急斜面を、先生の気持ちをかみ締めながら登る。

独標は、いつ行っても悲しい場所だ。今年、やっと8月1日に慰靈をすることができた。

当日、在校生の山岳部の子たちも登ってきてくれていた。本当に若いかわいらしい子たちだった。40年前の11人の若さを思った。

帰りはほとんどどしゃぶりだった。西穂も見納めというところで、雨が上がり西穂、独標がはっきり姿を現した。彼らがいると感じる。

これからも、今までと同じように「8月1日」は「8月1日だ」と思い生きていく。



林 純一

昭和42年8月1日の落雷事故の当日、私はテニスの合宿で学校にいました。最初はテントの支柱に雷が落ちたというようなことが伝わって大騒ぎになり、合宿どころではなかったことを記憶しています。ヘリコプターで遺体が降ろされ、校庭から講堂へ全員で見送ったときの深い悲しみは言葉には言い尽くせません。

事故から42年、卒業から40年という節目の年となり、追悼登山をしようという呼びかけがあって参加をさせていただきました。祝記念祭歌を歌いながら、ご遺族の皆様の無念さ、引率をされた先生方や一緒に登った仲間の皆さんこれまでの心労はいかばかりかと改めて気づかされました。

逃げ場のない険しい岩場での恐ろしい雷鳴、一刻も早く安全な場所へ行きたいとの思いも、圧倒的な大自然の営みの中では叶わなかったそのことが今更ながら残念でなりません。11人の御靈よ安らかに眠ってくださいと手を合わせつつ、また来ることを誓って西穂高岳独標を後にしました。



伴 修次

ひとつ確実に言えるのは、我々、皆犠牲になる可能性を秘めていた中で、11名の仲間が、犠牲となったということです。犠牲という表現は、的を射ていない可能性もありますが……

翻って、残ったメンバーは、ある意味新しい命を彼らから託された形で、各自の人生を歩んでいると言えます。

日頃意識していなくても、21回生の意識のなかで、生とは何か、死とは何か、運命なのか、必然なのか、はたまた、生き方・行動指針等、自問自答する中で、彼らのことが、浮かんできます。

今回、40周年を機に、思いを馳せ、そして共有することは、我々にとっての、必須の課せられた使命であると考えられます。

牧野恵子

7／31か8／1、山で、あるいは深志の庭で、何人もの友と会う。その途端、今自分が生きている土地での憂いは消え失せ 思いは独標に向かってしまう。

登っていなかったのに、いつも思っていた「なぜ、私が生き残ってしまったのか」という苦しみは以前ほどは無い。けれど、涙は溢れてしまう。

10年前、初めて独標に立った時、ここに「いる」私の心を駆け抜ける思いがあった。いったい何だろう？その答えを求めて何回か登った。もしかしてもしかして、私（私達）を生かしてくれているのは11人の仲間？という恐れ多い言葉が時々頭をかかすめることがある。それが答え？わからない。だけど、いつか彼の岸に行った時、先に着いている11人と真っ直ぐ向き合って、笑顔で会える人間になりたい。なれるだろうか。

百瀬修平

発電機器関係の仕事をしている為、発電所を止めない夏は休暇が取り易い。日本に居る時は毎年早い夏休みを取り、学校での慰靈祭に参加していた。

10年前に慰靈登山のことを聞いたが、私にとって登山は遠い存在だった。一年のクラスからは誰も事故に巻き込まれなかつたことや、クラスメイトになって4ヶ月しかたっていなかつたこともあり、あの時、一緒に登ったり、次に登る予定になつていた同級生や、11人と親しかつた、言わば内野のみが参加するのが慰靈登山だと思っていた。外野に居た私が慰靈登山に参加するのは、内野の人の輪に土足で踏み込むことになるのではないかと恐れたのだ。

そんな私の考えを変えたのは、慰靈祭に参加される遺族が年々年老い、数も少なくなつてきていることだった。残された遺族に顔を会わせ続けるのも辛いし、学校に行き、慰靈祭前後の30分で一年を振り返り、11人と対話するのも忙しすぎるのだった。



内野の人達には迷惑を掛けているかもしれないが、4年前から独標に登ることにした。昔のことを思い出したり、今年はこんな事があった、来年はこうしよう、などと色々なことを考えながら、一歩一歩独標への道を辿ることで、11人の対話を楽しんでいるこの頃の私である。

森野由紀

40年ぶりの独標登山でした。今年のあの天気で、雨もよいのあいにくの空模様でしたが、ガスの合間から時折上高地や西穂が垣間見え、久し振りの登山ができました。

毎年登っている方も、初めて登った方もいらっしゃいましたが、追悼の気持ちは年毎に深まるようで、独標では、「あそこが○○君の位置だから……」との声に、その時に引き戻されたように、胸を衝かれました。

ご遺族の方々や先生方の年齢になったときには改めて、彼らを惜しむ気持ちが新たになったと感じたものでした。

私自身は、深志高校へ行くのも、同級生の方々にお会いするのも何十年ぶりで、記憶は薄れ面影も見出せないほどでしたが、お話をしているうちに少しずつ、あんなこと也有った、こんなときもあったと、宝物のような歳月を、思い出すことができた一日でもありました。

お世話してくださった皆様、同行の皆様、ありがとうございました。



十一人の心

小松芳郎

昭和42年8月1日のその日、3年だった私は、昼間から学校でトンボ祭に向けての部活動をしていた。午後5時頃、休憩時間に「深志生が西穂高で死亡」と友達から聞かされた。そのうちに事務室へ新聞記者らしい人々がカメラを手にかけてきた。遭難したのは、学年登山の2年生のこと。事務室へは生徒が心配して集まつてくる。先生もどんどんかけつけてくる。黒板に「学年登山遭難死亡者名」が書かれていた。母親らしい人が来て、その黒板を見て「本当ですか、ほんとうですか」と先生に聞いていた。7時のNHKニュースでは、まっさきに取り扱われた。校内の電話があちこちでなっていた。

42年前の私の日記をとりだしてみた。

8月2日 水曜日 晴

朝学校へ行った。「本日補習中止」。まだ行方不明者がいるらしい。そのうちに、行方不明の3人の死亡が確認されたという知らせが入った。「死者十一人」。信じられぬ。午後1時30分頃、第一陣の遺体がヘリコプターで校庭に到着。同じクラスの人に運ばれて127教室に。そこで検視され、126教室で納棺される。棺が11個並んでいる。遺族の方々がかけつけてくる。母親の泣き叫ぶ声。「ちくしょう、くやしい、どうして母さんをおいていったの、どうして死んだの！」。思わず涙。3回ヘリが来て8遺体が収容された。126教室で3人の遺体の顔をみた。1人をのぞいてどこにも傷はない。ねむっている、本当に眠っているようだ。それだけに悲しい。次々と講堂へ運ばれていく。まだ3遺体は来ない。午後6時頃から講堂で告別式。花で飾られた写真の下に八つの柩が並んでいる。すり泣きがきこえる。7時頃からもうれつな雨。近くに雷が落ちたようだ。

8月10日 木曜日 晴

午後1時から県営体育館で西穂遭難の学校葬が行われた。会場へ行くと、いろんな所からおこられてきた花輪で一杯であった。1人ずつ献花して入場した。なかも回りはすべて花輪。正面に11人の御靈と写真が、花やお供え物にかこまれておかれてあった。11人に、各1人づつ特に親しい友人が弔辞を述べたが、それをきいて、僕も涙をおさえることができなかった。最後に、遺族の手で彼ら11人の御靈が、僕らの前から去っていった。しかし、我々の心には永久にのこるであろう。

その時留めた記録から、当時の記憶が蘇ってくる。この時から、私は、「深志」の「志」の文字を、「十一の心」と読み替えて、事故で亡くなった十一人を偲んでいる。

独標 42年

小林俊樹

雷災救助行

「コバチャー行くじゃん……」 昭和42年8月1日午後8時過ぎ、そんな呼びかけて、私を軽トラックに乗せた二木計臣（かずおみ）君（深志5回・山岳部OB）の一声が、その後に続く独標参りの始まりだった。以来42年、その因縁は今日に続く。その二木君もすでにこの世の人ではない。時の非情が、50歳に満たない彼の命を奪ったのは、慘劇後十数年たってからである。

当時、まだ30代前半の青年教師だった私は、松工定時制山岳部の一一行とともに、黒部川源流を踏査し（4泊5日）、前々日帰宅したばかりだった。一日の眠りが疲れを癒やしてくれてはいたが、疲労はまだ残っていた。だが、有無を言わせぬ現実がそこにあった。被害の状況は不分明であり、ニュースも一転二転していたが、雷災の現実だけは確かだった。雷についての会話は、二人の間に何もなかった。みだりな憶測や批判めいた言葉もなかった。行路は、今日とは違う梓川渓谷沿いの旧道の夜を、無言で運転する彼と、時々眠気覚ましの雑談で紛らわす私と、それぞれが岩上の悲劇を思いながら、しかも一言も口にしない、奇妙な運転席と助手席だった。それが口数の少ない彼と私の、いつもながらのパターンだった。

深夜11時20分着、赤羽誠校長をはじめとする教師諸氏と、西糸屋当主奥原教永さん（松中69回）の待機する、現地対策本部の夜は悲壯だった。ほとんどが蒼白の表情で、眼だけが光り、右往左往するだけにも見えた。旧知久しぶりの邂逅が、そんな形であろうとは誰しも思ってはいない。被災の状況も不明確、誰しもが不安と焦燥を胸に秘めて、時だけがいたずらに過ぎていった。ほとんどが無言で、何らかの連絡を待った。もちろん寝る間などない。応急の食べ物ものぞに通らなかった。

深夜12時半、現地への出発時間が予告された。断続的に到着するOB諸氏との対応もそこそこ、1時半には三々五々、西穂山荘への登りについた。その多くは無言だったが、一つだけ今でも覚えているのは、何人かの遺体を背負い下ろすことの難しさのやりとりだった。ヘリコプターは遺体を運ばない、というのは当時の常識だったからだ。そのヘリもチャーターできるかどうか？ 疑心暗鬼は募るばかりだった。

西穂山荘の朝まだきは、まさに地獄絵だった。その中で山荘主村上守さんだけが、厳しく的確に、屋内を取り仕切っていた。山荘南側の各部屋は、終日の疲労に耐え、恐怖に顔をひきつり、放心したような生徒たちと、被雷して応急の処置を受けた、痛々しい怪我人の姿だけだった。

救援に駆けつけたOBといえども、初対面者が多い。歳の差もあり、山歴も違う。深志現職の小野朋士さんの指示に従って、それぞれの部署に就いたのは、朝も白々と明けた頃だった。二木君と若手大学山岳部員たちは、独標周辺の遺体収容を担当することになった。私は刻々と変わる事実の記録と、西糸屋本部との情報連絡に当たった。電話のほとんどは、取材報道陣の定時予約に奪われ、学校当局はもちろん、西糸屋との連絡もままならなかった。やむなく電話中継局に、深志関係の優先を強引に頼み、何とか急場をしのぐことができた。

すでに周知のことだが、時の防衛庁長官増田甲子七氏（松中37回）指示による、三重県明野（陸上自衛隊航空学校）からのヘリコプター2機の出動と、松本駐屯部隊・千葉二尉以下三十数名のレンジャー隊が、怪我人や遺体の搬送の大手を引き受けてくれたことが、厳しい現実の時間を極度に短縮してくれることになった。山荘前の臨時ヘリポートからは、岩井二佐率いる2機が、交互に重軽傷者をピストン輸送してくれ、千葉二尉以下が、担架で運んでもくれた八遺体は、1時間弱で空輸して終わり、登高中の不安は一挙に解消した。その間の岩井二佐と私の対話？ を記しておく。

岩井「遅くなりましたが、ただいま到着しました」 私「ご苦労さま、大変でしたネ、……、ところで……」（暫く両者無言。）私「ところで……遺……」この言葉を打ち消すように、岩井二佐は拳手の礼をしたまま、「長官命令！何でもります……。」こう明言してくれた、そのときの記憶は、今でも明確によみがえる。

かく山荘での活動は、2日午後2時40分で終わった。上高地への下山後の、岳沢側三遺体搬送救助作業も、夕刻7時半終了。疲れ切った一行のほとんどは、多くを語ることなく、自衛隊赤十字車を中心として、ひたすら谷間の悪路を走り続けた。母校着10時55分。なんとも慌ただしい、20数時間の激闘だった。

（因みに二木計臣君の遺稿『深志落雷遭難記』全文を、許可を得て別掲することにした。）

その後の独標

以来42年、（奇しくも昭和42年と同数）の時を閲して、まだ私は独標参りを続けている。何故だかは、自分にもわからない。だがその頃になると、じっとしていられないのも事実だ。あるいは、すでに習性化しているのかも知れない。多くは言うまい。

まだ若かった鈴岡潤一さん（落雷時被災者　当該学年（21回生）當時飯田工高教師）に初めて会ったのは、昭和55年の13回忌当日だった。いつの間にか、毎年の追悼登山が知られていたのか、山荘での初対面は、村上守おやじを通してだった。以来間歇的な交友が続いている。

深志高校の教師になったのは、落雷の翌年。当該学年（21回生）との、直接のふれあいはなかったが、少なくとも1年間は、同じ屋根のもとに生きた。

その後は、同窓や同僚の何人かや、教え児の誰彼などと同行したが、ほとんどは上高地からの登りだった。ひどい雨降りの何年かもあった。やむなく手前の丸山で黙祷で終わることもある。時には新聞記者と出会ったこともあり、気の進まぬ取材を受けてネタにもなった。

長年の間には、当然何人かの校長さんも同道した。新設の新穂高ケーブル利用の最初は小原元亨校長との同行時だった。

忘れられないのは、焼失前の山荘の一室での村上守おやじとの、前夜の一献だった。コップヘルの薬缶いっぱいのお酒に酔い、酔うほどに声高になり、岩稜を偲び、天を恨み、地を呪い、傍観者たちの勝手な批判に抗弁し、顔も知らない17歳を、間接に弔いもした。従業員にたしなめられたことも、しばしばだった。そのおやじさんも今はいない。

故人といえば、独標を経ての行き帰りの縦走で、しばしば立ち寄った、岳沢の上條岳さんも、もうこの世の人ではない。岳沢・西穂山荘間の新道を発想した彼に、沢筋の偵察

を頼まれたこともあった。

公職を去ってからは、新築の山荘と、守さんの孫の文俊さん（昭和42年生まれ）との交友が続く。同行する人々の顔ぶれも、ずいぶんと若くなった。卒業生ばかりでなく、現役の諸君の数も随分と増えた。犠牲者の同年生も年ごとに数を増した。献花も焼香も重くなつた。かつて山荘のおやじが持たせてくれた、可憐なクルマユリが何とも懐かしい。

そして今年、奇しくも21回生卒業40年の記念の年（平成21）に、全国各地から集まつた34人との雨中の追悼には、一入（ひとしお）の感慨があつた。時の重傷者を含めて、みんない親父やお袋さんになっている。11人は17歳のままだが、集まつた人たちはもう還暦に近く、母校の高橋校長はじめ、若い山岳部員を含めた20名とが一つになつた「めぐり来ぬ今年」の時は終わつた。西穂独標への憶いは、まだ風化してはいない。

（H21.9.25）（深志4回・元教師）



深志落雷遭難記

二木計臣

マサカ !! 最初耳にした一報は、簡単にあしらって、全く相手にしていなかった。

昭和四十二年八月一日、午後四時頃だったと思う。日中の蒸し暑さが、やや静まった頃、結局それが曲げられない事実であるということになったのは――。

某新聞社では、すでにキャッチしている情報を、全く快く提供してくれた。たまたまその記者とは、山でのお付き合いが二、三回あったせいか、また、私がO B の一人であるということでなのか。とにかく相手方が色めき立っている様子が、押さえつけた興奮と、重い口調とによって、受話器を通して、おおよその状況を見当つけることができた。

当時、遭難の知らせが具体化するまでは、私の推測には幾つかの迷いがあったし、幾つの推察の段階があった。

「深志の生徒が……」ということは、私にとっては、即ち「山岳部員が……」ということだったのだ。その頃、小野先生以下部員七名が、七月二十二日に松本を発って、黒部の源流に入っているからだ。私達の時代と異って、日程、コース、所用時間、連絡先などを詳細に記した山行計画書七号が、すでに出来ていて、事前に私の手元にも一通が届けられてあった。それによれば、七月二十六日にはすでに双六を越え、新穂高温泉より西穂の稜線を越えて、上高地に下っていることになっている。しかし、これは北アルプスの縦走コースの中でも困難な、入る者の少ないコースであり、天候の関係等で日程が遅れてしまい、惨事となってしまったということなのかな……。それにしても黒部の奥深くでならば兎も角、真夏の西穂くんだりで、まさかそんなことが、と考えさせられた。でも数年前、不幸にも山岳部では、部員一名の犠牲者を出している。それもヒヨンなことからである。実際、災難なんていうものは、昔からどんな時に、どんな場所に降りかかるかわからぬ。しかし、その場合、部員の不注意による滑落かも知れない。でも、一度に転落してそんなに沢山の犠牲者がいるはずがない。やはり、情報の違いで、場所は全く違ったところにきまっている、と考えた。

それが、部活動に降りかかった災難ではなく、思いもよらぬ一般生徒の、しかも集団登山に――。それも西穂高岳独標で、落雷のための大惨事。いたいけな多数生徒の遭難であったとは、誰が想像できようか。

上高地を中心に、夏季日帰りコースとして山を選ぶならば、一般向き、特に高校生対象として、西穂高岳ほど条件のそろった山はない。三時間程の行程で、稜線に出られる。体力が及ぶ者は山荘に休んで、周りのハイマツを眺め、花畠を散策するも素晴らしい。すでに頂上を眼下にできる山々もあり、高度感も眺望も充分満喫できる。自信のある者は、更に独標を経て、西穂山頂へ稜線をたどれば、そこはもう、いわゆる穂高岳の一部なのである。男性的な岩膚を直かに感じ、軽いスリリングさえ覚え、加えて登山の歓びを味わうことが出来る。今更、衆知のこの山を、ここで書きたてたところで仕方のないことだが、こんな都合の良い山があるからこそ、何年か前から、集団登山の日帰りコースとして、当然のように選ばれて来たのである。

例年、夏山シーズン中、特に梅雨明け直後の七月二十日頃から八月十日頃までの二十日間は、日本列島は平均して天候に恵まれる。部活動の学生にとっては、夏休みに入って、

その二十日間のうちの前半は、特に日数を要する縦走計画に当てられるのが常である。

この頃には、北アルプス方面の残雪も、既に狭まった谷間のごく一部、例年晚夏に残る定まった地域、いわば大雪渓を除いてはわずかに残っている程度である。ましてや、西穂稜線には、全くといってよい程、その姿は見られない。言い換れば、雪上での滑落という心配は、頂上へ向かう稜線上では全くない。加えて、少し悪場になる個所には鎖が用意され、道の浮き石は片付けられ手入れされている。落石も二、三ヵ所で少し注意すれば、集団で登っても安全で快適なところといえよう。熱帯性低気圧の来襲もほとんどなく、雷雨の発生も割合少ない。今回憎んでもなお余りある雷雨の発生であるが、これがまた、晴天と登山と雷雨という皮肉な関係にあるのだから始末が悪い。気象学に全く素人の私でも、体験上、梅雨の間とか、熱帯性低気圧が接近している時は、曇天ばかり続いている、雨が降ったりやんだりのいやな天気であり、雷の発生はほとんどない。だから、雷が恐くてこれを回避しようとするならば、天候の悪い時に登山すれば良いことになる。といつてしまふくれて雨の中を苦労しながら、眺めのきかない頂上へわざわざ行ってくるような馬鹿はないだろう。その上、雷以上に高山での冷え込みに出くわす方が、危険度は何倍か高いのである。快晴で気温もぐんと上がり、灼熱の太陽の下、汗にまみれて、より高くより陥しく山に挑む。実に夏山の醍醐味である。しかし、こんな時こそ、最も雷の発生を呼ぶ危険が高いのである。しかも、天気が良ければ良い程、午後になって、地形を選んで局部的に、集中的に激しい雷になるようである。

雷について現在のところ、地方の測候所でも、時間・地域等具体的な予報はしていない。

「今日は夕刻頃、北アルプス方面に雷雨があるでしょう」

といった程度が最大限の具体性になっている。一概に、北アルプス方面なんていっても、例えば、北の白馬は快晴に恵まれ、南の乗鞍は雲に覆われ、笠ヶ岳には積乱雲が発達している状態だってざらにある。しかも、この積乱雲も、いつの間にかどこかに移動して消えてしまい、西穂には一滴の雨も落とさず、辺りに青空が見られるようなことだってしばしばあることは、山小屋の人々はよく知っている。

「雷雨があるでしょう……」

ということで、大事を取って登山をやめていたら、いつまでたっても登山なんか出来やしない。だから、小屋の人も絶対に登頂は駄目だ、などと自信を持って止めさせるようなことは絶対にしないだろう。仮に、その日快晴に恵まれた白馬を、雷の予報にもとづいて、登山中止をしていたら、頂上にいる人達の、笑い草になるだろう。

少し誇張気味だったかもしれない。少々くどくど言い過ぎたかもしれない。しかし、あえてこんなことを言うというのは、今回、登山史上まれにみる大惨事ということで、マスコミのあらゆるもののが取り上げたが、その中の二、三について非常に見当外れな扱いをしたものがあり、私はこれに反論をしたいからである。

客観的事実についての報道については、全く異論はないとして、これに対する批評や解説について大いに問題がある。しかも、これが直接関与しない人々の世論を、大きく左右するのだから、報道機関の取材そのものが、これ程、無責任で恐ろしいものはないと思う。

「登山家A氏の談」とか、気象学の大家「B氏の説明」等々。

「予測できた雷雨」「引率者に判断の甘さ?」「積乱雲が出たら避難、金物外し岩陰へ」などと見出しにして記事にすることは、当人自筆の原稿を載せるならば責任の持つて

行きようがあるから兎も角として、談話等記事にされた場合、当人の意図することや、その雰囲気を充分に伝えることができず、当人の真意との間に、しばしば食い違いが生じてしまうものである。

なんの場合でもそうであるが、当事者、特に批判される立場にある者は、神経を痛めながら、少なからずこの記事に異議があつても、この段階では余程の機会がない限り、それに対する反論を公にすることは不可能である。また、談話を載せられた当人にとっても、とんだ記事にされてしまって、後ろめたい面映ゆい気持ちで何日も過ごさねばならない羽目となってしまうことだってあるだろう。

マスコミの世界では、少々の食い違いについては、ひとたび活字にしたものについては、権威にかけて、なかなか撤回などしないのがお決まりであるし、大きな誤りであっても、片隅のほんの一程度のお詫びということで、片付けてしまうのが常識である。

事件の数日後、某紙に気象に関する専門家で登山の経験が豊富だという人の雷についての談話が載った。彼の豊富な経験から割り出した防止法ということで、再び悲劇をくり返さないためにと掲載したのである。

しかし、これはあくまで現場にそぐわない、一般論に過ぎないと思う。それによると、積乱雲が発生したら、すみやかに待避すること。気圧配置はどうか。雷が昨日は発生したか。「カミナリ道」はどのコースか、などを小屋の人達に尋ねたり研究したりしておくこと。日本の山では、たいてい一~二時間もあれば、小屋につけるから、早く小屋に避難すること、などともっともらしく掲載されていた。

しかし、実際問題として、万事を慎重に、こんなことをしていたら、シーズン中登山なんか出来やしない。言っている本人だって、恐らく山へ入れば、経験からくるある程度の勘を頼りにするだけで、さほどの配慮もなく、入山しているに違いない。とかく世間を騒がせた後には、遠いところからエライ人が、必ずエライことを言うものである。第一、カミナリ道なんてものが、今日の段階で、指摘できるものだろうか。ケモノ道ならいざ知らず、山小屋の人に聞いたところで、具体的に示してくれる人がいるはずがない。ただ、周りを見回して、首をかしげながら、およその雲の流れを示してくれる位なことで、結局は稜線が、いや、山という山全てが、被雷しやすいものであるということになってしまうのである。

北アルプスに限らず、谷川岳でもどこでもよいが、各ピークごとに落雷の数や、そのエネルギーを長年にわたって科学的に統計を取り、もしその辺からカミナリ道があると判断したならば、早いところ是非、地図にでも明記して公にしてもらいたいものである。

「ヘソ」を押えながら道端に頑張って、一度でいいから虎のフンドシをのぞいてみたいものである。昔から、地震・雷・火事・オヤジと恐ろしがられて来ているが、雷の力が恐ろしいということだけでなく、いつ、どこに落ちるか判らないという恐ろしさが、今日でも変わらぬ通用語となっている所以である。

西穂の落雷の少し前のことであるが、松本平の平地でさえ、野良仕事の最中に被雷して落命した人がいる。平地であっても、このような悲劇は、過去をたどればあちこちに限りなくあることであろう。

次に金属類の扱いについてであるが、これもまた、完全な処置を施すことは不可能なことである。濃霧や霧雨に包まれたり、急に雨が降り出したりした時に、髪の毛が逆立つような感じがしたり、手に持つピッケルに、いやな感じを受けて、あわてて放り出したりすることがよくある。高い山では、稜線や支尾根ばかりでなく、沢を登っている時でも、霧

の中で、髪を引かれることがあるものだ。

でも、あわてて放り出せる物は、ピッケルや時計ぐらいなものである。アクロバチックな岩登りに用いる道具は別として、市販されている一般の登山用装備品を、注意して集めてみても、必ず金属がどこかに用いられている。登山靴の底や、軽装のキャラバンシューズの底にはじまって、靴ひもの止め金、ニッカーズポンの止め口、ズボンのファスナー、ズボンのバンドの止め金、飾りの大きなバックルなんて不用なものを外したところで、落雷に際しては、バンドの止め金も飾りのバックルも大した変わりはないだろう。ザックにしても例外ではなく、止め金がいっぱいいろいろ。眼鏡や入れ歯も危険がいっぱいいた。まさかバンドを外して、片手でズボンを押えながら逃げ出すことも出来ないし、入れ歯を抜いて、眼鏡を捨て、登山靴をぬいで駆け出すわけにいかないだろう。今回の西穂の遭難の場合、あの大きな鎖がありながら、それが直接の原因でもないということだ。夏山登山という楽しみには、必ず雷の危険はついてまわるのだ。事が起きた後、何だかんだともっともらしいことを言う人達の説を尊重するならば、そんなことまでして、敢えてその安全性の徹底を図るということなら、何も苦労して山になんか登らなくとも、家で蚊帳の中に入って本でも読んでいればよいだろうと言いたくなる。

とりとめのないことを、あれこれ持ち出してしまったが、「予測できる雷」だとか「引率者に甘い判断?」だとかいう、当時の新聞見出しに対する、私なりのささやかな反論である。

八月一日、午後九時。在郷の山岳部OB達は、出来得る限り救援のための連絡や準備を整えてから、私は小林俊樹先輩と、トラックにて松本を発った。ドライアイスは時間が遅くてどうしても間に合わなかったが、生花は忘れずに、いっぱい用意していった。

十一時、上高地に到着。

木村小屋は報道関係の車が詰めかけているので素通り。庄吉小屋に寄って、いっさきに西穂独標へ向かう心算りだったが、おそらく西糸屋が、遭難対策本部になるだろうということと、奥原教永先輩を訪ねる。県警・救助隊本部・駐在所・西穂山荘・深志高校と、諸々の連絡や問題について、校長先生を中心に多くの人達が忙しく動き回っている。よくあることだが、どさくさにまぎれて、とかく感情問題がこじれ、トラブルが起きやすいのが常である。ましてや、最盛期を迎えた上高地にて、対策本部を設けることは並大抵のことではない。山岳遭難救助隊との折り合いや、県警関係、遺族やその関係者の受け入れ等、全てのことがスムーズに進んでいた。これらは陣頭に立って指揮されている校長先生は勿論、相も変わらぬ当地奥原先輩の人柄の賜物であったと思う。

時間の経過につれて、真夜中になつても、遠くから続々と多くの人が集まって来る。卒業生やPTAの人々、先輩や後輩、山岳部OBや山岳部現役。実に伝統ある母校愛と、後輩への愛情が、各々年齢の差はあっても、これまでに多勢の人々に引き継がれている



のかと思って、なんとも頼もしかった。集まった全員が分担協力すれば、たとえ時間はかかるっても、手厚く遺体を一つ一つ引き上げることが出来る。誰もが地に這いつくばってでも、という気持ちであった。

県警、小野・青木教諭、馬力あるOB荒井、高田の一行が先発し、しばらくして私達も山荘へ向かって出発した。死亡確認者は、ともかくとして、行方不明三名と、山荘に収容されている負傷者の処置が第一の問題である。重傷者は一刻も早く松本へ安全に下ろさねばならない。暫定的に、山荘から上の全ての記録は、小林俊樹先輩が最適任ということで、快く引き受けられた。後続してかけつけて来られた三原先輩は、次々と発生して来る諸問題を一括して担当する総務的な役割についてもらった。

行方不明三名については、岳沢側へ転落し、ほぼ絶望視されていた。しかし、確認が無い以上、生きている可能性もある。夜明けを待って、搜索に当たるということになった。涸沢より、夜を徹してかけつけた県警常駐隊員と、山岳部OB高田・荒井が山荘から搜索に先発する。私は田中弘美OBと共に、岳沢側にてこのサポートに当たる。その他、山荘に到着した卒業生のうち、遺体運搬のためまず十二名が独標まで登って待機することにした。独標の上には、いたいけな生徒の遺体が、所せまく収容されている。独標の岐阜県側に建てられていた一メートル位のケルンは跡形もなくすっ飛ばされている。飛騨側に突き出ていた大きな岩の突先も、赤い岩肌を残してめくりとられ、谷間に飛び散り、落雷のものすごさを、さまざまと物語っている。事件直後、いち速くかけつけて、多勢のけが人や、転落している遺体を、独標の上まで収容された西穂山荘の人達の並々ならぬご苦労が、ひと目で感じとられる。

間もなくして、転落して行方不明となっていた三名は、同じ場所に折り重なるようにして遺体で発見された。ハイマツを切って作った芝ゾリに遺体を収容し、稜線へ計上げることも考えられたが、結局、岳沢を下ろすことにした。この作業に当たったグループは、少人数のためと、トランシーバーの連絡がうまく取れなかつたことで、がら場から灌木帯へと簡単に考え、食糧や水を充分に用意していなかつたので、運搬に相当苦労をしていた。こんな場合でも、大学山岳部員の高田は、やはり現役の力強さを、いかんなく發揮して、終始ずば抜けた活躍を見せていた。

自衛隊のヘリコプターが、山荘前から遺体を運び降ろしてくれるという確実な情報を知って、これ程心強く思ったことはなかった。そうなれば、一日で全員松本まで遺体を収容できるからだ。

独標から急な一カ所通過すれば、あとは山荘まで割合平易なハイマツの間を行く道である。しかし、いくつもの遺体を独標から平坦部へ降ろすまでが、また大変なことであった。山荘の村上守さんが独標での陣頭指揮を取ってくれている。

三角形の背負い子が三つ用意された。固定のメインロープを片手に握り、片手で岩をつかみ、徐々にゆるめてくれる確保用のロープが、いっぱいになるところまで降りる。少しでもバランスをくずすと、遺体と共に岩にぶつかり、いやという程腰を打つ。それでも、慎重に気配りをしながら、無事遺体を降ろし終えた。平坦部では、自衛隊のレンジャー部隊員が、背負い子から遺体を外し、担架に収容してスムーズに山荘前のヘリポートまで運んでくれた。平坦地とはいえ、独標下から山荘までは長い道程だった。一つの遺体を背負い降ろすにも、三、四名が担がねばならない。レンジャー隊員の統率された行動とバイタリティーが、全遺体収容に当たって、これ程まで時間的短縮をはかってくれたとは。

仮に、協力がなかったとすれば、丸二日や三日はかかるに違いない。遺体となった少

年達の顔は、全てが綺麗であった。清らかな初々しい顔つきのままである。最近、若者達の間に流行っている記録本位の登山。敢えて、危険度の高い、特別な場所を、特別な時期に、特別な方法で登る。言わば前衛的登山とでもいうのか。そんなものを求めてあえない犠牲になった人達の遺体には、その悲惨な姿に、目を被いたくなるものがあるが、それとは全く異質なものであった。

顔に軽い搔傷はありながら、静かな小さい吐息さえ、うかがえそうな、微笑さえ投げかけてきそうな姿であった。ある者は、永遠に消え去ってしまった温もりさえ触れなければ、全く仮眠でもしているかのように、今にパッチリと瞳を開いて起き上がりそうな感じさえする姿であった。この世に生を受け十数年。親の翼の下で、ただひたすら、すぐすくと育ち、世間の裏表や穢れも知らず、純粹に生き、純粹に学んで来た後輩達よ。これから歩む道が、君達の人生であるというのに。それだけに気の毒でどうしようもなかった。やりきれなく涙が流れた。もし多勢かけ参じてくれた救援の人々や、ヘリコプター等機動力がなくとも、一人で頑張

ってでも、たとえ地に這
いつくばっても、彼等を
背負って大切に家まで送
り届けてやろうと、不
可能を可能ならしめる意氣
込みに駆り立てられ、涙
も出さず、痛みさえ訴え
ない一人の後輩を静かに
抱えあげた。

(深志 5回・山岳部
OB)



2007年のこと

職員同人誌『ふかし62号』編集ノート（2008年2月刊）抜粋

昨（2007）年は、西穂の40年目にあたる。『ふかし』の創刊は1965年のことであるので、10号からは、西穂関連の記事が散見される。今年度のPTA会報でも山岸編集委員長の計らいで、西穂慰靈碑を記事として取り上げてくれてもいた。今日的に事故そのものについてや慰靈碑について忘れられつつもある。そうした状況に対してこの場がふさわしいかどうか疑問なしとしないけれど、今年度の西穂関連についての報告をしておきたい。

まず、信濃毎日新聞の記者が、上高地から登る山岳部の生徒の同行取材を行い、報告記事が8月2日に掲載された。合わせて、同紙の記者で、同年代の大西健文記者の署名記事が掲載された。また、松本市民タイムス記者が、飛騨ロープウェイコースを登る同期生一行の同行取材を行った。

信濃毎日新聞の続報の中に報告されたのが、とんぼ祭に発表された漫研の三年生の瀧澤輝己作『蜻蛉ヶ丘に』である。同様の記事が少し後れて市民タイムスに載り、その記事の末尾にそっと書かれた「残部若干あり」という一言が波紋を呼んだ。その日の朝から電話がひっきりなしにかかる状態となり、作品の増刷に及んだ。作品が約200人を結びつけた。その中には、中継してくださった方を介してではあるが、私自身を西穂山荘から松本駐屯地まで運んでくれたヘリコプターの操縦士も含まれている。中継してくださった方の御父君も、事故後に長野県警に設置された同種の業務に携わることになったゆえに、ついでいただけたとのことである。その方は、校舎内の様子を知らない方の作品理解のために、作品中に出てくる場所の写真を添えて送ってくださったのである。

読後感もいくつか返送された。次のようなものもある。

「…命について考える時間を与えてもらいました。生きていることは当たり前ではないこと、すごいことだということ。…日々頑張って、生かされていることの素晴らしいをかみしめて過ごしてください。…私も自分を愛して、大切にして生きてゆきます。」

そうしたことが起こり得たのも、彼女の作品がまさに「命の歌を歌」っていたからである。私からも瀧澤輝己さんに感謝の意を表したい。

（文責 鈴岡潤一）

資料編 目次

悲劇繰り返すまい			信濃毎日新聞	1967 (昭和42) 年 9月11日
悲しみも新た	遭難一周年		信濃毎日新聞	1968 (昭和43) 年 8月 1日
西穂独標に祈り	遭難十一回忌		信濃毎日新聞	1977 (昭和52) 年 8月 2日
独票に悲しみ新た	遭難十三回忌		信濃毎日新聞	1979 (昭和54) 年 8月 2日
松本深志高校落雷遭難から30年			信濃毎日新聞	1997 (平成 9) 年 8月 2日
松本深志高校落雷遭難から40年	20人が追悼登山		信濃毎日新聞	2007 (平成19) 年 8月 2日
今も語りかける11人の仲間			信濃毎日新聞	2007 (平成19) 年 8月 2日
松本深志高校の落雷遭難	生徒が作品に		信濃毎日新聞	2007 (平成19) 年 8月 8日
北ア山小屋を訪ねて	西穂山荘		信濃毎日新聞	2008 (平成20) 年 8月 3日
落雷遭難から40年			松本市民タイムス	2009 (平成21) 年 8月 2日
みすず野			松本市民タイムス	2003 (平成15) 年 8月27日
みすず野			松本市民タイムス	2005 (平成17) 年 8月 1日
みすず野			松本市民タイムス	2006 (平成18) 年 8月 2日
みすず野			松本市民タイムス	2007 (平成19) 年 8月 1日
みすず野			松本市民タイムス	2008 (平成20) 年 8月 1日
みすず野			松本市民タイムス	2009 (平成21) 年 8月 1日
北ア山麓幻想行	196	西穂独標への道 1	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 8月 3日
北ア山麓幻想行	197	西穂独標への道 2	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 8月10日
北ア山麓幻想行	198	西穂独標への道 3	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 8月17日
北ア山麓幻想行	199	西穂独標への道 4	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 8月24日
北ア山麓幻想行	200	西穂独標への道 5	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 8月31日
北ア山麓幻想行	201	西穂独標への道 6	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 9月 7日
北ア山麓幻想行	202	西穂独標への道 7	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年 9月14日
あの日あの空		人生点描 34	松本市民タイムス	2002 (平成14) 年11月24日

7.11 悲劇くり返すまい

西穂落
雷難

遺族らが追悼登山

八月はじめ北ア西穂高岳で集団
登山の途中、落雷に打たれて遭難
した松本深志高校生の母親など遺
族二十四人が、十日遭難現場の独

標まで追悼登山し、花やくだもの

などをして愛児や兄弟の靈を

なぐさめた。この追悼登山には松

本深志高校の職員十人、医師二

人、山岳部の生徒四人も同行し、

このよつば悲惨な事故が二度と起
きないよう、深く黙とうをさけ

た。

中条寛樹君の父、嘉門さん(＊)
、島田利夫君の妹、恭子さん(＊)
なども含めた一行は、九日西穂
山莊に泊まり、十日午前八時ご
ろ、山莊の主人、村上守さんに案
内され、現場の独標へついた。
「ひじで私の子供が死んだのが」

ど現場へついたとたんにすわり
こんでしまう母親。一行が小屋を
出るところから、深かった霧も消え
はじめたが、見えがぐれする空

岳、壁岳、それに穂高の山々を見つ
め、くちびるをかみしめ涙をこら
えながら愛児をじのぶ父親もあつ
た。遺族の一人一人が遺体のあつ



た場所に村上さんの案内で花束や
線香をあげ、「靈安らかに」と祈
った。遺族たちは「こんな事故が
なければ、ここで寝ることもな
かつただろう。これからは力の続
く限り、毎年一度ほどの山にきて
子どもたちをしのびたい」といっ
て言った。



独標で花束をそなえ、靈を慰める遺族たち

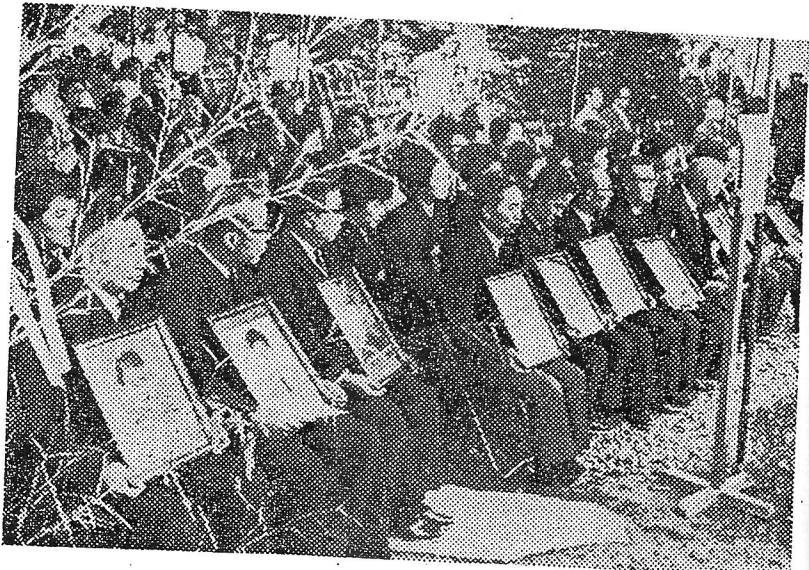
悲しみも新た

松本深志高の西穂遭難一周年

遺族ら出席して追悼式

昨年の北ア西穂高落雪遭難からちょうど一周年を迎えた一日、松本深志高校で西穂遭難一周年追悼式典がおこなわれた。

この日は、死亡した十人の生徒の遺族ら八十六人をはじめ、同校生徒職員約八百五十人、同窓会、PTAのほか、西沢知事代理長、警察、自衛隊の代表ら来賓約



わが子の遺影を胸に追悼式に参列した遺族

五十人が参列。午前十時から同校講堂前に完成した西穂遭難慰靈碑の除幕式がおこなわれた。

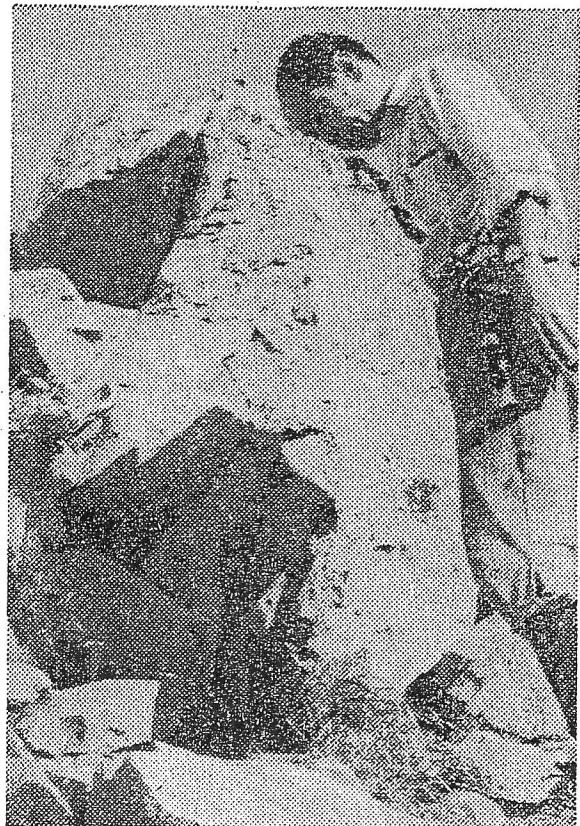
式は神事で始まり、遭難した故小林太郎君の父親、小林唯雄さんが遺族を代表して慰靈碑の前の綱引き、除幕をした。このあと伊沢校長が「世に例のない災害を負った悲しみを、多くの人たちの励ましで耐えてきた。追悼文集もでき、慰靈碑の除幕がじきにことを」と語った。

来賓を代表して西沢知事のあいさつ(代読)があつたあと、遺族

を代表して故中条寛樹君の父親、中条寛門さんが「わが子たちは、肉体的には成長が止まつたが、生徒のみなさんの心のなかでたくましく生き続けている。みなさんも元気を出して勉学に励み、死んだわが子たちをもとい成長させてほしい」とあいさつし、改めて参列者の涙を誘つてみた。

西穂独標に祈り

深志高生落雷遭難11年



追悼にやさしきたのは、松本市埋蔵・深志高校教諭小林俊樹さんら。小林さんは、四十二年の事故で救助活動にあたったが「悲劇が二度と起きない」ので、「」と、毎年八月一日には独標を訪れている。りょう線の四力所には、数日前からビスケット、花などが供えられていた。一方、松本深志高では、一日午後、モニーメント前で十一回目の慰靈式が行われた。遺族ら約三十人のほか、夏代みの補修授業で登校した在校生三

十人が参列。午前十時から同校

北ア・西穂高岳独標で松本深志高生一人が落雷のため遭難死してから11年だが、今年も、同校教師らの追悼登山が行われた。遭難現場にむけられた花がりょう線を行く登山者び山の安全を呼びかけているのがやめだった。

今年も追悼登山 学校で慰靈式

百人が西穂に向かって金賞で黙とうをささげた。

西穂は、穗高連峰の中では初心者向きのコース。岐阜側からはロープウェーで気軽に入山できる。だが、その日の天候を気にせず装備も不十分な者、ハイキングのつもりでやまといふる県外の学生登山者、深志高の遭難以来、県内の学

校集団登山は安全に特に気をつけようになつたが、事故があったことすら知らない県外の集団登山もある。

確かにこの十年間落雷による山の事故は少ない。しかし先月二十八日、槍ヶ岳に登っていた東京の中学生パーティー約五十人が落雷に遭い、手にやけどをした生徒が出た。黒い霜の真、佐久地方で雷の犠牲者が続出しただけに、山小屋などは、「とにかく朝の天気をよく判断してほしい」と警戒している。

(大田川村) 特集

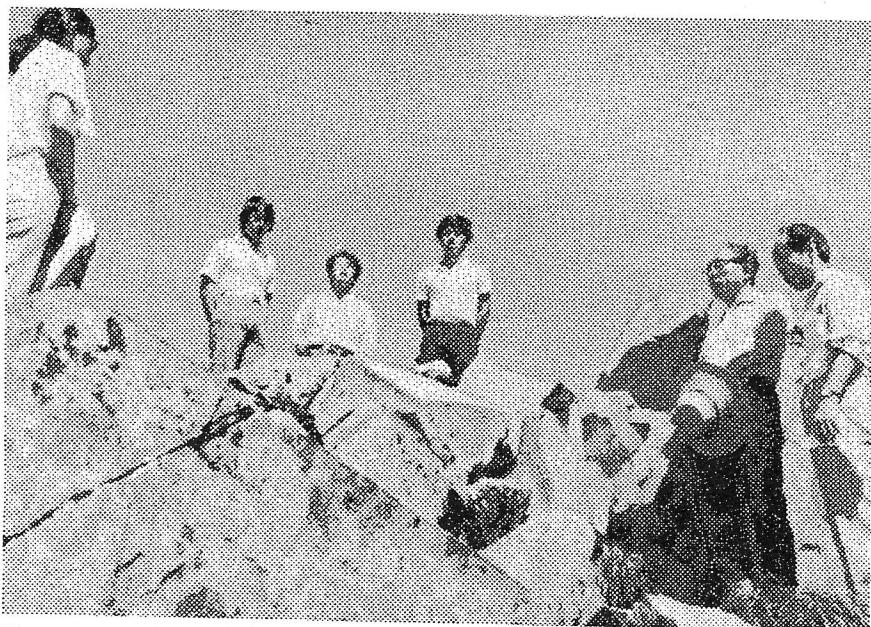
濃海日新報

独標に悲しみ新た

深志高落雷
遭難13回忌 校庭でも慰靈式

「十一の御靈よ永遠に」。四十
二年に北ア西穂高岳独標で起きた
松本深志高校生の落雷遭難事故の
十三回忌にあたる一日、現地と松
本深志高校の落雷遭難事故の
われた。この日の独標は、快晴で
若い人たちでぎわつたが、校歌

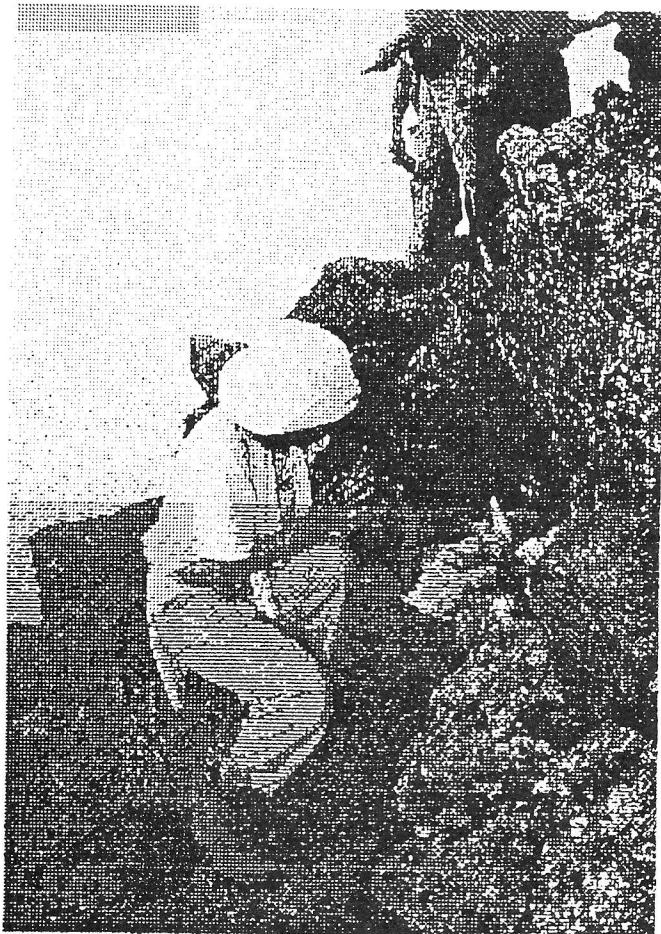
などが穗高連峰に流れるといは
静寂に包まれた。
この日独標での式に参加したの
は、鈴木脩同校校長、小林俊樹教
諭、昨年同校を卒業した学生ら七
人。午前九時過ぎ、岩場の一角
に、白と黄の菊が飾られ、一人一
人が線香をあげて合掌。一分間の
黙とうの後、校歌などを合唱し亡
き友をしのんだ。



晴れ上がった独標で、犠牲者をしのび校歌などを斎唱する関係者
松本深志高の前庭にある慰靈碑
前には、遺族やかつての同級生、
教職員、夏季特別講座や運動クラブの練習に出ていた在校生ら約三百人が参列。午後一時四十五分、
西穂高岳の方向を向き全員で黙とう。続いて、それぞれの代表が慰
靈碑に献花。遺族代表の折井親市さん(六〇)、松本市埋橋一郎が「こ
ういうことを契機に、山へ行つても慎重な行動を」と悲しみも新たにあいさつした。
一人息子の博親君をなくした折井さんは「十一人のうち五人が一人息子。生きていれば三十歳近くになり、孫もできているだろうに」と思い出されて、毎月一日にはだれかどうかが慰靈碑に花を供えてるんですよ」と話していた。

第三種郵便物認可

松本深志高 落雷遭難から30年



あれから30年。松本深志高生落雷遭難事故の犠牲者のめい福を祈る同窓生ら

西穂へ慰靈の登山

北アルプス・西穂山頂出発で一九六七(昭和四十二)年、集団登山の松本深志高校(松本中)二年生十一人が死亡した落雷遭難事故が三十年前の一四日、同校の青山誠教頭や同窓生ら五人が慰靈登山をし、めい福を祈った。同校では慰靈祭を開いた。開会式の胸に

「正社員」と、何回か初めてこの同市蟻ヶ崎、新村小白合さん(当時)一同内

慰靈登山は三十年前の後一時四十分後、西穂高岳からの下山途中、独標下

集団登山に参加した同市横田智三、畠内多賀子さん(当時)と

「正社員」と、何回か初

めてこの同市蟻ヶ崎、

新村小白合さん(当時)一同内

事故は三十年前の一四日川の足窓生一人も参加。新村さんは「三十一年間、怖いものないこともないことがありました」。

當時現場にいたメンバー

を説いたたび、絶対行かな

いと誓って誓っていた。それ

ほどの心の傷は深い」と語る

新村さん。畠内さんは「

」おじローブウエード簡単

に登れるようになった。そ

んなに立場に来ていい場所

なのかどうか…」。

忘れられない 痛み込み上げ

で雷雨に見舞われた。畠内さんは山頂まで行かず、「さき返した組、山莊で遭難の知らせを聞き、骨折用の添え木を持って向かった。無我夢中で他のことは覚えていない」。その独標にのりの「田午後一時到着。雪づけにす」と記載した。

同校での慰靈祭は、遭難の悲劇を伝えるモニュメント前で、遺族や同窓生、在校生の約八十人が出席して黙じてささげた。遺族会長の小林唯雄さん(当時)同市岡田さんは、毎年同窓生の姿を見ると、生きていればこのくらいかなあと想い、つづく。OBの浜重俊さんは、「同一市横田一は、三十年目ところに出席者が少ない。時の流れを感じます」と感嘆した。

第三種郵便物認可

「あの日」を忘れない



松本深志高校の落橋遭難事故から40年。北アルプス西穂高岳独標で行われた追悼式＝1日前午前11時20分

松本深志高落雷遭難から40年

北アルプス・西穂高岳独標付近(三、七〇一五)
で一九六七(昭和四十二)年、集団登山中の松本深志高校(松本市)二年生が落雷に遭い、一人が死んだ。十三人が重軽傷を負った遭難事故から一日で四年がたった。現場では、同校の同窓生や坂巻道弘校長らが慰霊登山をし追悼。同校でも、遺族や同期生らが慰靈碑の前で手を合わせた。

午前十一時すぎ、独標
東側斜面の岩場で行った
追悼式には、県外に住む
同期生を含め、二十人近く
が参列。默とうの後、
同校に伝わる祝記念祭
歌を静かに合唱した。
(57)は事故の際、重傷を負
富士山までも見渡せる真
青空を背景に、「四十年前
の落雷が信じられない」と
つぶやく人もいた。

隊の最後尾近くを歩き、後に居た勇士たちに見送られた。松本深志高生の西穂高岳落雷、負傷した。1967年8月1日午後4時40分ころ、松本深志高生の集団登山パーティーが西穂高岳山頂から下山途中の独標（第一独立標高点）で落雷に遭い、生徒11人が死亡、生徒と引率教師13人が重軽傷を負った。

「死徒は死」の生徒が昨年から
つた。集団登山に参加した生徒
率教師5人を含む計55人だ。
西穂に登頂したが、気象判断をば
さざまざと議論があつたが、
引率者の過失責任は問わな

同期生の牧野恵子さん
（56）仙台市立は同期会
の写真と同校創立三十
周年の記念DVDを持参
した。みんな元気にや
つてゐる」と報告する
のが私の役目。これから
も懸賞登山を続けていたい」と涙を聞いた。

人が追悼登場

時すぎ、独標 富士山までも月没渡る
の岩場で行った。つ青な空に、四つ
の落雷が信じられぬ現象が現れた。
「は、県外に住む」とつぶやく人もい
ふ。黙とうの後、(57)は事故の際、
「祝記念祭」に登場する錦糸潤が、
かに合唱した。

一日午後一時半、松木深志高橋を
の西郷遭難慰靈碑前で、今年も毎年
族や同窓生、在校生ら約百人が参列して慰靈祭が開かれた。十人の命を奪つた落雷遭難から四十五
年の歴史。この日参列した遭難者は八家族の十人。亡くなつた生徒たちも当然現役ながら退いていた。高校三年で亡くなつた十一人と同期生たつた私を含め、慰靈祭に参列した。

(大西 健文)

あの日、悲報を知ったのは夕方。激しい雷雨で家に飛び込み、テレビのスイッチを入れる。友人の名前が画面に流れていた。学校に駆けつける。重苦しい雰囲気の中、新たな情報は入らず、最終電車で大町市の自宅へ引寄せた。

翌日は朝から学校に待機。午後二時ころ、自衛隊ヘリでシュラフを運ばれてきた仲間の一人が、

五語りかける11人の仲間

遺体を、担架に乗せて校内に運んだ。
収容できなかつた三人の遺体を除く八人の遺体が並ぶ講堂で夜の「お別れ式」。激しい雨。雷が学校附近を襲い、電灯が消えた。女性生徒の悲鳴。長男成幸君をして、した堀江久美乃さん(8)・松本市議ヶ崎には成幸たちが、雷を運んでくれた。

成幸君と私は同級生であり、同じ部活動の仲間だった。私たちのクラスから登山に参加したのは七人。五人が死亡した。重傷を負つた一人は級友です。残る一人は翌年、命を絶った。七人の級友全員が私たちと一緒に卒業できなかった。

思いました。
差で分かれます。歳月は流れ、このしかかづく一ポツカタを語らない

仲間 登山に参加したある仲間は「忘れているもの」と「あの日」を語らない。悲惨な現場で分かれた生死…四十年の歳月は流れても、「あの日」は重くのしかかる。「ボッカリ空いた胸の穴は埋められません」と堀江さん。命のはかなさこその大大きさ。親たちの涙は悲しく、「一人の仲間たちが少年のままの姿で語りかけてくる。



西郷道
合せ志高校

4人集めて、
をめぐつ
が、県警
わなかつ
つてること、報告す
るのが私の役目。これが
も慰霊登山を続けたい。
と涙をふいた。

負った。現在は母校の社会科教師で、山岳部顧問も務め、部員二人と三十日から入山した。

当時、四十六人の登山隊の最後尾近くを歩き、

松本深志高生の西穂高岳落雷遭難
1906年8月1日午前
引率教師5人を含む計56人だった

獨標北側斜面の鞍部（あんべ）近くで落雷に遭った。背中から右足にかけ雷が走り、はじめ飛ばされ、際に右耳を裂傷した。後に居た男子生徒は死んで、生かせるか自問してきた

と鈴木さん。「山岳部の生徒が昨年から追悼登

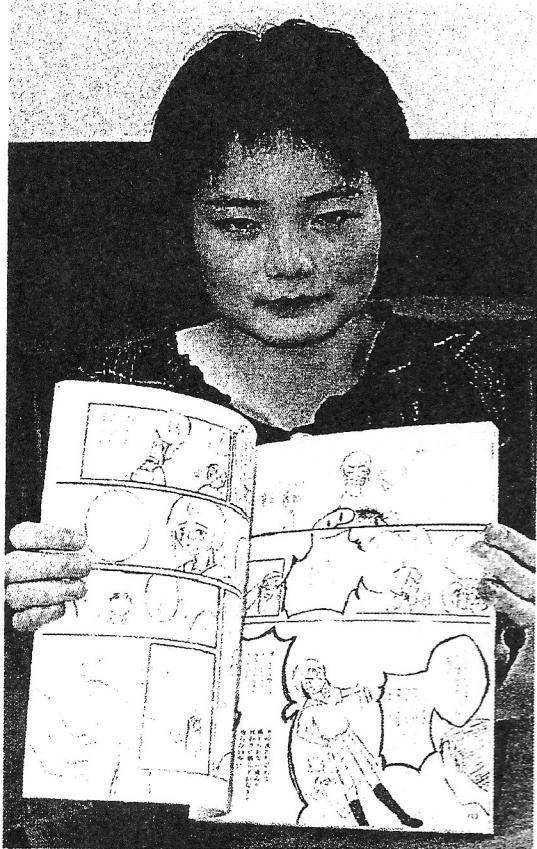
山を始めた。彼のが事故のことや命の大切さを受け継いでくれることが何よりうれしい」

同期生の牧野恵子さん（55）「仙台市」は同期会の写真と同校創立百三十周年の記念DVDを持参

第三種郵便物認可

11

命の尊さ漫画で



近で一九六七(昭和四十二)年八月一日に起きた松本深志高校生らの落雷遭難を風化させたくない、同校三年生の滝沢輝己(てるみ)さん(17)が事故をテーマにした漫画を描いた。一人が死亡、十三人が重軽傷を負った遭難を「多くの人に知つてほしい、命の尊さを考えてほしい」との願いを込めている。

作品は、文化祭の準備で校内に泊まり込んでいた男子生徒が四十年前にタイムスリップし、遭難事故で亡くなった生徒の遺体を講堂で迎える「お別れ式」に立ち会つたという内容で、約三十六。

滝沢さんは漫画研究会に所属しており、作品は七月の文化祭で部員の作品を集めて発表した冊子に

松本深志高校の落雷遭難 生徒が作品に

では、負傷した生徒の中見つけた。岡潤一さん(57)の名前も

井泉水さんが亡くなつたことでも作品に影響したといふ。「人はいつ死んで、「もうと詳しく知りたい」と、市中央図書館で同校がまとめた事故報告書を読んだ。落雷現場の様子などを記した生々しい内容にショックを受け「指先から血の気が引いた」という。報告書

3年生の滝沢さん 報告書に衝撃 風化させない

に伝えたい」と考え、鈴岡さんから体験を聞き、アドバイスも受けながら、約二ヶ月かけて描き

松本深志高校の落雷遭難事故をテーマにした漫画を描いた滝沢輝己さん

と、好きだった歌手の坂井泉水さんが亡くなつたことでも作品に影響したといふ。「人はいつ死んで、命の尊さを伝えられた。私は事故の体験者ではないけれど、自分なりに命の尊さを伝えられればと思った」。作品の終盤で登場人物に「命を落としてしまう可能性は全(すべ)ての人々に等しくあります。つまずいても傷ついても今のこの瞬間を大切にしていく」と語らせている。

一日に独標で行われた追悼式に参加した鈴岡さんは、「亡くなつた仲間や集まつた同期生に漫画のことを報告した。事故を知らない世代が命の重みを受け止め、事故の記憶を受け継いでくれるこ^{とはうれしい}と話している。

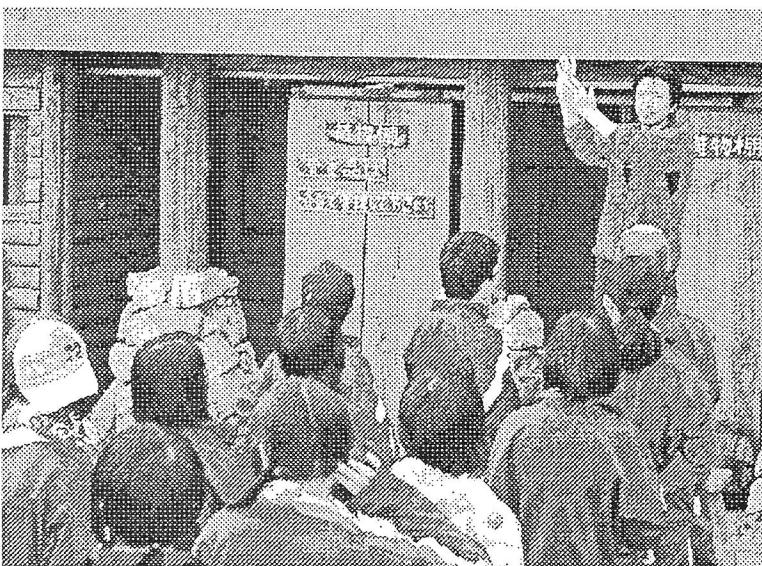
第三種郵便物認可

信濃毎日新聞

中便 南信

北アルプス山小屋を訪ねて

西穂山荘



学校登山の中学・生徒に山の美しさや歴史を説明する粟沢さん=7月24日

「厚い雲ではないから、まだ雷雨の心配はない。でも早めの行動に越したことはないですよ」。七月二十五日午前、北アルプス西穂山荘の支配人粟沢徹さん(45)は上空を見ながら、奥穂高岳へ向かう登山者たちに助言した。

一九六七(昭和四十二)年八月一日、西穂高岳独標付近で起きた松本深志高校の落雷遭難で、山荘は負傷した生徒や引率者の収容先になった。

社長の村上文俊さん(40)「松本市は同じ六七年の九月生まれ。事故に対応した祖父の守さん(故人)、二代目で父親の健一さん(67)から遭難の話を繰り返し聞いてきた。気象遭難を後世に語り継ぐのは象徴的だ」と語る。

この小屋の責任。スタッフ研修の初めには必ず事故の概要を説明する。

この四十年で、山荘周辺は変わった。七〇年に岐阜県側に新穂高ロープウェイができ、独標まで二時間余で行くことができる。近年は团塊世代の退職と中高年の登山アーバンが重なり、登山者も増えた。

「その分、不十分な装備のままの登山者も目につくようになつた」と、九二年から支配人を務める粟沢さん。昨年、奥穂高岳から縦走してきた二人組が午前二時に山小屋に到着したこともあった。「夜は足元が危険なのでビバークしない」と言い返す人がいる。

語り継け「風化させぬ」

松本深志高校の西穂高岳落雷遭難事故 1967年8月1日午後1時40分ごろ、松本深志高校生46人が西穂高岳山頂から下山中、独標付近(2,701m)で落雷に遭い、生徒11人が死亡、生徒と引率教師13人が重傷を負つた。

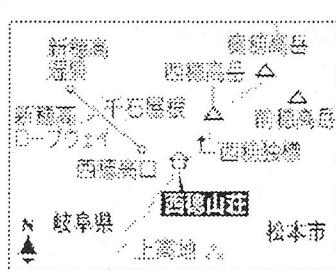
粟沢さんは山の魅力を語ることも忘れない。「山の美しさや自然のエネルギーを感じてほしい」。七月二十四日、学校登山で山荘を訪れた長野市東北中の二年生たちにそう呼び掛けた。「山は人間の高慢さを正してくれる。厳しさも山の魅力」と話す。

周辺では毎年、遭難者が出てる。地元遭難対協に所属する粟沢さんはなぜ山に登るのかと嘆く遺族に、「命を捨てるためではなく、前向きに生きるために登るのです」といつた内容の手紙を送つて励ますこともある。そのたびに「深志の事故を風化させてほいわない」と強く思う。

落雷遭難事故で負傷した一人で、今は松本深志高校の教壇に立つ鈴岡潤一さん(58)は、文俊さんや粟沢さん(58)を知る。「当時は建物も人も変わったが、事故の記憶は引き継がれている。感謝しています」

莊のホームページにも周辺の気象情報を載せ、入山者への注意喚起を怠らない。

(島田周)



西穂高岳(2,909m)への登山路上、岐阜、長野県境にあり、西に岐阜県飛騨地方、東に松本市上高地が望める。村上文俊社長の祖父の守さんが1941年に開設。90年に火事で焼失したが、92年に再建した。北アルプス山小屋で唯一、通年営業している。定員は約250人。

市民タイムス



昭和42年の西穂落雷事故

北アルプスの西穂高岳独標(どひよう)で昭和42年、集団登山中の松本深志高校の2年生が落雷を受けて11人が死亡した事故で、卒業40年を迎えた当時の同期生たちが一日、現地で追悼登山を行った。事故で重軽傷を負った7人など同期生34人と、現役の山岳部生徒ら計54人が参加して、犠牲者を追悼した。

(小岩井貴之)

深志同期生追悼で登山

独標を仰ぎ見る尾根で黙とうする同期生ら(1日午前11時50分ころ)

△西穂高岳独標落雷事故 昭和42年8月1日、集団登山の松本深志高校2年生46人(うち教師5人)が、北アルプス西穂高岳(2,909m)を登頂。下山途中の午後1時40分ころ、岩稜(いのう)の独標(2,701m)で被雷し、生徒11人が死亡、生徒と引率教諭ら13人が重軽傷を負った。学校登山の歴史に残る大惨事となった。



祝記念祭歌を歌つた。
仙台市の池原義明さん
(58)は当時、事故に遭つた生徒たちと別日程の後発組で、初の独標登山となつた。『穂高連峰はほとんどの登つたが、西穂だけはもうしても行く気になれなかつた』とい

10月10日、

朝からの霧は晴れ、周辺の峰々がくっきりと見えた。参加者は全員で黙とうをささげた後、深志高校の校歌と、歌い継がれる祝記念祭歌を歌つた。

式の始まった午前11時45分ころに雨が降つたが、香や花を手向かた。独標を仰ぐ尾根に下りて一緒に追悼式をした。

正さま(59)=諏訪郡富士見町)=は10年ぶりの追憶だね」とつぶやいて涙をぬぐつた。落雷事故で岐阜県側に

卒業40年独標で鎮魂歌

穂モニュメント前で、追悼行事を営んだ写真。遺族や同級生、現役の生徒ら100人以上が碑に花を手向け、事故に遭った生徒たちの冥福を祈り、一度と悲劇を繰り返さないと誓つた。

当時の登山ルートをたどるように、前日に上高地から入山した人と、当日に岐阜県側からロープウェーを利用して登つた人が、それぞれ独標一線を歌ふ。終わると、悲しい歌が、そのままやいて涙をぬぐつた。

約100人が転落した上高

う。「一つめひを爰とわ

かづべく、命の歌を歌は典を行う。代表幹事の上

条誠二さん(58)=松本

市中央会=は「同期生の

中でようやく一つの区切地から入山した人と、当

ばや」と続く祝記念祭歌

五味千萬人教頭が、追

悼登山に同行した高橋康

穂モニュメント前で、追

悼行事を営んだ写真。遺族や同級生、現役の生

徒ら100人以上が碑に花を手向け、事故に遭つた生徒たちの冥福を祈

り、一度と悲劇を繰り返さないと誓つた。

さないと誓つた。

みすず野

校長の藤本光世さんは、長野市篠ノ井にある曹洞宗の寺院「龍眼山円福寺」の住職でもある。この夏、三十六年前に行われた学校登山の道をたどった▼上高地から四時間余をかけて西穂山荘に着いた。翌八月一日の早朝、同山荘を出発、独標を経て、西穂高岳までは三時間の行程だった。頂上には三千分ほどいた。帰りは休憩を挟み、独標には午前十時二十五分に戻った▼OBの小林俊樹さん、独標北斜面で被雷負傷した鈴岡潤一さんたち四人が一緒に歩いた。さくティーと合流した。小さな祭壇を作り、白百合を手向け、酒をそそいだ。独標では関係者の別ペーパーと合流した。小林さんの司会で黙とうをききげた▼お盆が過ぎ

てから、藤本さんは遺族宅を訪ね、登山の報告をした。クリスチヤンである遺族の一人から「神は耐えられないような試練を与えない」と聞いた言葉を、二学期の始業式で在校生に伝えた。遺族の心と姿だった▼「西穂落雷事故を胸に刻み、祈り続け、学び取ることが努め」と藤本さん。学校年間行事表の八月一日欄には、昨年から「西穂遭難追悼行事」が書き加えられた。深志は忘れない。

みすず野

三十八年前に高校の教頭だった清水和彦さんは、校長室にいた。時の校長とともに、米国から帰国した生徒を囲んで懇談していた。午後三時ころだった▼農科警察署から連絡が入った。「本日午後、穗高独標付近で落雷のために五名が死亡した、いや、後からの報告だと十名が負傷したとの報があったが、本日の生徒が独標に登ったかどうか」との質問であった▼清水さんはメモで二年生の登山があったことを知り、警察にその旨を伝えた。校長は非常招集をかけた。波乱の教育人生を振り返り、さきに刊行した自叙伝『学びの旅教えの道—戦前・戦中・戦後を生きて』に詳しく記した▼「一切の責

任は私にある。私が命じて行ってもらったのである。先生方はほど苦労さまと申し上げることはない」。教職員にそういって学校を去った校長の言葉である▼西穂高岳独標で、集団登山中の一行が落雷に遭い、生徒一人が亡くなった。母校での慰靈行事や、追悼の登山が行われている。巡る八月一日の記憶として深く刻まれる深志落雷忌。

松本深志高校の一年生九人が職場見学に訪れた。働くことの意味を考え、進路決定や大学選択の参考にする学習活動だ。最新鋭の新闘製作システムに驚いた様子だった▼情報はどう入手するか、にも強い関心があつたらしい。事件の多くは、関係機関の発表や読者からの情報提供による。西穂独標落雷の悲劇は、警察から報道各社に第一報がもたらされた。三十九年前の八月一日だった▼学校は豊近で落雷のため五人が死亡した、いや後からの報告だと十人が負傷したとの報があつたが、生徒が登つたかどうか」。新聞社は現地に大勢の記者を送り込んだ▼集団登山中の二年生十一人が亡く

みすず野

なった。母校にある慰靈モニュメントの前で追悼式が行われた。坂巻道弘校長は一人ひとりの名前を読み上げ、「現任校長としておわびする。明るく安全な学校づくりを誓う」と述べた▼練習中の運動部員たちが花を手向け、補習中の在校生は授業を中断して黙とうをさげた。追悼登山も続いている。校史百三十年に刻まれた悲しみと祈りはこうして受け継がれる。

松本市の自営業内川清志さんは五十六歳になる。北アルプス西穂高岳の独標を思つ。遠い過去の出来事なのに、五感に擦り込まれた体験と記憶は鮮明によみがえる▼山頂で弁当を広げると、いきなり雨が降りだした。西穂山荘に避難しようと下山を開始した。遠くで雷鳴が聞こえた。遠くで雷鳴が聞こえた。独標の急斜面にかかり、四つんばいで登つて倒れていた。背中越しに名前を呼んだが返事はない。「丈夫か」。叫び声が聞こえた。見上げる

みすず野

た電撃は、右肩と右足に抜けていた。用を足して遅れ、内川さんを追い抜いて独標の上りを急いだ人が、雷に打たれて亡くなつた。生死と人生を分けたあの日。「運があったのかな」と思えるようになつた▼一九六七(昭和四十二)年八月一日だった。集団登山中の松本深志高校の二年生と教諭が独標で被雷し、生徒十人が死亡した。山岳遭難史に残る落雷事故からちよつと四十年になる。

みすず野

四十一年前の音風景は「葬送行進曲」で始まつた。西穂落雷高校の学校葬である。実は録音テープが残されていた。夏の記憶がよみがえる▼「心むなしさの果て、悲しみの極みに耐えて」。式辞に立った当時の赤羽誠校長はこう切りだした。亡くなつた教え子一人ひとりの名前を呼んだ。合唱「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」を挙み、生徒の弔辞へと移る▼親しみを込めた呼び捨てで遺影に向かつた友がいた。遠足の思い出をすり泣きながら語る仲間もいた。夢や学術の理想を語り明かした夜があった。「遠い世界に行つても心の中に生き続ける」。時空を経ても変わらない▼「おまえ

の分まで立派な花を咲かせてみせる」「悲しみを無駄にしない。君の分まで頑張る。僕たちはきっとやる」「おまえが果たせなかつた夢をおれが果たす」。涙の誓いは、力ミナリ学年が抱く共通の思いである▼昭和四十二年八月一日だった。集団登山中の深志高二年生と教諭が西穂・独標で被雷し、生徒一人が死亡した。山岳遭難史に刻まれた。命日の祈りと追悼登山が引き継がれている。

みすず野

鈴岡潤一さんは、母校の松本深志高で世界史を教える。あの夏の日、背中のほぼ真ん中に雷撃を受けた。右足の親指のつめが変形している。雷が抜けていつたあとである▼北ア・西穂山荘への下山途中、独標の上りにさしかかったところで氣を失う。背中に入った雨の冷たさで意識が戻つた。右耳がちぎれそうになつていて。後ろ向きに倒れた際、岩の角で切れたらしい。とにかく寒かつた▼若き日の迷路の先にあつた急斜面で、運命が分かれた。岡さんは助かり、すぐ後ろを歩いていた親友は亡くなつた。「人生を拾つた」「生かしてもらつている」。当事者である事実を語り始めた時間であった▼山岳部の

顧問を務める。在校生たちを引率して今年も向かう追悼登山に、大学2年生になった次男が同行する。長男も父親と同じ高校2年に登つていて。子どもたちに、寡黙な男親の背中はどう映つていただろう▼昭和42年8月1日だった。集団登山中の深志高2年生と教諭が独標で被雷し、生徒11人が死亡した。わが国山岳遭難史に悲しく刻印された「カミナリ学年」の卒業から40年になる。

北アルプス幻想行

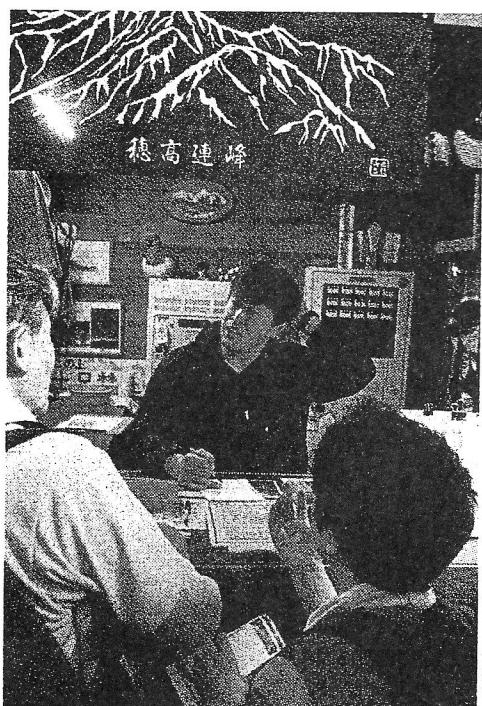
西穂高岳独標^{どっぴょう}。この悲しい響きを持つ岩峰に立ちたい。

立つてどうなるものでもないが、立つことによって何か体感でき、当事者や関係者の消えることのない深い悲しみの淵に、わずかでも寄り添え、山というものの、人生というものを感じる契機になればいい。そんな想定とうか、強い内的衝動に突き動かされていた。

三十五年前になる。昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の集団登山の一一行四十六人(うち教師五人)が、北アルプス西穂高岳(二、九〇九メートル)登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜を登攀中、落雷に遭い、十一人の生徒が死亡、十三人が重軽傷を負った。

これより半世紀以上前の大正二(一九一三)年八月二十六日、中央アルプス駒ヶ岳で中箕輪尋常小学校(現・箕輪中学校)の生徒ら三十七人が台風に遭遇し、生徒十人と赤羽校長の合わせて十一人が死亡しているが、奇しくも「死者十一」という数字が一致する。

大惨事に遭った松本深志高校生たちはいま、五十二歳。社会の中堅を担い、人生花盛りの時節を迎えていて不思議はない。生還した彼、彼女らはどんな人生を歩んでいるのだろう、また引率した教師たちは、遺族は…。遭難から一年、同校が発行した分厚い追悼文集『独標に祈る』をリュックにしのばせ、上高地から一行が登ったと天体同じ登山道をたどった。



3代目・村上文俊さんが登山客と応対する

針葉樹林帯の急登が続き、苦しかった。休む度に冷える体にまた汗がどっと噴き出してきた。西穂山荘前の斜面にお花畠があり、ハクサンフウロの美しい花に疲れを癒された。西穂山荘は平成二年秋、火災で全焼してしまい、四年に完成したログハウス風の山荘。専務の村上文俊さん(三回)がやさしい笑顔で迎えてくれた。

ロビーの頭上に、在りし日の村上守さん(初代)が愛犬とともに写る大きなパネルが掲げられてあった。少年時代、上条嘉蔵次に連れられて初めて上高地に入り、やがて山小屋建設の夢を抱き、労苦の末に実現、名ガイドと称された「西穂のおやじさん」だ。

松本深志高校の事故発生の際も、従業員を現場に急行させ、登山者に協力を請い、自らも背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、おつかねする生徒らを励まし続けた。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

文俊さんが生まれる一ヶ月前の出来事。「山は人の心を変える力あり」が口癖だった守さんの精神は、「二代目・健一さん(三)、孫の文俊さんに受け継がれている。岐阜県側に新穂高ロープウェーが開設されて以来、登山者のほかに小さな子供連れや年配者が増えた。「安全が何よりです」と語る文俊さん。泊った日の夕、けが人も背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、暮れる危険な状況下での的確な判断をする姿に、守さんの「幻影」を見た。

現場に駆けつけた「おやじさん」

朝日に染まる峰 険しく美しく

山の朝は早い。

西穂山荘で用意してもらった朝食のおにぎりをリュックに詰め、日の出前の薄暗い登山道を登る。尾根道に出で、高度を稼ぐ。鳥が切れる。背後の焼岳の山頂が朝焼けに輝き出した。

「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を

若い単独行の女性が、気ばかりせいて足が空回りするこの不格好な中年男を追いかけて行く。同僚のカスマラマンが重い機材を背負つてあえぎあえぎ登って来る。

独標が近づいた。岩峰というより、四角い大きな岩の塊だ。

直下の鞍部で一息入れ、氣を引き締めて岩場に取り付いた。途中で足元の視線を横に移すと、ルート右わきに小さな「慰靈の碑」が立っていた。下山後、遺族を訪ね歩いて知ったのだが、この慰靈碑は松本深志高校や遺族会が建立したのではなく、命を落した十人の中の一人、嶋田利夫君の穗高中時代の同級生たちが、重い石を担ぎ上げ、据えたものであつた。碑前に跪き、手を合わせ、写真に収めた。

午前五時三十五分、独標の頂(二、七〇)一

がに立つた。
そこは思ったより狭く、中高年のツアーデすでに満杯状態だった。ちょうど朝日が前穂高岳の峻厳な峰々から昇って、岩塊を神々しいまでに染め上げた。

見事というほかない眺めだった。北は西

穂、ジャンダルム、奥穂に続く険しい岩稜、西は美しい姿勢の笠ヶ岳、遠く白山、南は焼岳、乗鞍、東は遥か富士山と甲斐駒ヶ岳、北岳、仙丈、塙観、赤石、聖岳といった三〇〇以級の南アルプス連山、手前に中央アル

バス、左手に八ヶ岳…。

三十五年前、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は午前十時四十五分にここに着き、早めの昼食を取っている。このとき、西穂頂上までははつきり見え、天候急変の兆は感じられなかった。

ただ、西穂山荘主の村上守さん(故人)は、早朝起床して笠ヶ岳方向を眺めたとき、「赤いキレギリになつた雲を見て『今日は危ないぞ』と思った」という。この雲が出ると

必ず雷雨になるわけではないが、従業員に注意を促している。

独標から西穂高岳山頂までは人のすれ違いにも神経を使つゝせ尾根が続く。しかも大小の鋭い岩稜が連なり、両手両足でバランスを

取つてよじり、足場を探して這いつづくよう

下る。

一步間違えば谷底に墜つ逆さま。緊張の連続だが、これぞ登山の醍醐味と言えば、そうである。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)



登山者でにぎわう西穂独標

一瞬の雷光 11人の若い命散る

三十五年前の八月一日、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は、西穂高岳(二、九〇九m)に登頂した。しかし、山頂はガスに覆われて全く眺望が利かず、午後四十分ころ、鈴木重春教諭(リーダー)を先頭に下山を始める。

下山と言つても一気に下れる山ではない。

やせ尾根が続き、足場を確保しながらはいざる岩壁もあって、相当な緊張を強いられる。

一行が下山開始するころ雨が降り出し、岩は濡れて一層の注意が必要だった。大きなピクを下り切ったところ、豪雨がやって来た。大きな雹が交じり、みるみるうちに足元の岩のくぼみにたまつた。

「私は本当に『しまったな』という思いに胸を衝かれていた。この天候はまさしく雷雨である。私は『どうしようか』と慌しく思ひめぐらした。雹混じの雨は烈しく、飛騒側から吹き上げる風は冷く強い」(西穂遭難追悼文集『独標に祈る』より)。

「私」とほ錦木教諭である。この稜線上で待避か、稜線を避けて急斜面で待避か、独標を越えてハイマツ地帯に逃げ込むか、三つに一つ。だがどれも危険を伴う。

「独標を越える以外ない」

錦木教諭は腹を決め、すぐ後ろに続く書始めた女生徒を励ましつつ、先を急いだ。稻妻と雷鳴が迫ってきた。そして一行が独標越えしているまさにそのとき(午後一時四十分ころ)音もなく火が吹いて、雷が落ちる。

鈴木教諭はすでに独標を越え、九人の生徒とともに南側斜面にいた。その瞬間、頂上すぐ上に光を見、鼻に強烈な衝撃を受けて体が宙に浮かび、仰向けに沈んでいく。「ああやつぱり」の思いと、「終わったな」という思

いが交錯した。

落雷の瞬間、独標頂上に八人、頂上を目指す北側斜面に二十三人、鞍部から後ろにはさらに五人がいたのだが、死者、重軽傷者は鈴木教諭以外、すべて北側斜面(長さ二六・六m)に足を掛けた二十三人だった。

頂上に立っていた者が被害に遭わらず、斜面を登っていた者に被害が集中した。不思議なことだ。これは落雷放電が雨を媒介にして、抵抗の少ない岩の間に伝わったとの説がある。(『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』より)

懸命に目を瞑らしもの、三十五年前の痕跡がありようはずもなく、岩間に咲く清楚なイワツメグサが風にかすかに揺れていた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

西穂独標の落雷遭難 昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の一一行四十六人が西穂高岳からの下山途中、独標で被雷し、男学生十人が電撃死もしくは電撃ショックによる転落死した。重軽傷者も十三人を数え、落雷遭難史上、空前の大惨事となつた。救助活動は西穂山荘、東邦大学医学部、学校の関係者、警察、自衛隊レンジャーなどがおこなつた。

西穂独標への道 ③

「やれやれ、独標さえ越えてしまえば」の引率教師の願いもむなしく、落雷は西穂高岳独標(二、七〇メートル)頂上付近から火を噴き、あたかも濡れ雑巾でシャツとたたいてごく北側斜面を貫通した。

松本深志高校二年生の一一行四十六人のうち、二十三人が斜面を登っており、直撃を受けて、ある者はその場に仰向けに倒れ、ある者は長野県側にまたある者は岐阜県側に飛ばされて、断崖を百㍍二百㍍転げ落ちた。

一行の最後尾にいた五人(うち教師一人)は、まだ北側斜面には至らず、鞍部に向かって対面を下降中だった。

その一人、上条誠二さん(当時)は松本市中央二号は、落雷の瞬間、前に出して、右足に打たれたような衝撃が走り、痺れを覚えた。びっくりして視線を上げると、北側斜面を登攀中の一人が長野県(左)側に両手を上げて後ろ向きに落ち、岐阜県(右)側にも岩場を転がるようにならへて落していくのが見えた。

「先生、人が落ちました」と叫んだ気もある。先生の指示でその場に立っていたが、雷と電気が烈しく、体が冷え切って凍死ぬのではないかと思つた。長野県側に十㍍ほど

胸奥に刻む それぞれの記憶

落ちた田代宗広君が「血が止まらない」と言つたので、そこまで下り、借りた手ぬぐいで縛つたが、うまく縛れなかつた。

現場は修羅場の様相を呈していたにちがいない。「やつてしまつた」と慌てふためく先生をよそに、生徒たちは半ば茫然とし、打ちひしがれていたようだ。

かなりの時間がたち、西穂山荘からの救援隊が到着した。上条さんは重傷の田近恵寿君がザイル確保で稜線まで引き上げられ、背負子で運ばれるのを手伝い、すでに暗くなつた足元を懐中電灯で照らしながら、山莊に向かつて歩いた。

「独標に上がる途中、何か掛けたある人がいた。そのときまで死者が出ているとは夢にも思わなかつた。ショックが大きかつたせいか、あまり記憶がないんです」と語り、小さく首を振つた。



当事者、同級生たちの思いに温度差はある。だが、そうであつても西穂高岳のある岩稜が、彼ら一人ひとりのその後の人生に重厚な存在感をもたらしたのは間違いない。

文 赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂高岳への道)

がると、そこに顔中血だらけの田近君が倒れていて、田近君は頭をもたげ、「誰?」と聞いてきた。二人は救助隊が来るまでそこにじつとしていたが、上では横内教諭が二人の居場所に落ちそながつた。

「空中を舞つた」上島さんは九死に一生を得、救助隊に導かれ、独標を巻くようにして下りた。現場の惨状を見ていたため、恥ましい体験として残らなかつたせいか、のちに本格的な山登りにめり込んだ。

この上条さんに転落を目撃された一人はおそらく、上島正吾(当時)諏訪郡富士見町である。上島さんは被雷直後、岐阜県側の急斜面を百㍍落つこちた。気がつくと仰向けて頭は合側にあつた。腰を動かして体を横向きにし、這い上

事故調査報告 松本深志高校は西穂高標遭難事故一年後の昭和四十三(一九六八年)八月一日、追悼文集『独標に祈る』を発行。翌年三月には詳細な遭難記録とともに、登山計画や行動上の問題点を洗い出し、気象専門家らの寄稿も加えた『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』を刊行した。「集団登山として安全を確保するためには、あの天候の中で西穂稜線上を行動してはいけなかつた」と明記、「この悲しい事故の教訓をよく学びとり、生かして行くことが十一名の諸君に報いる道」と刻している。

消えない亡くした悲しみ

西穂高岳独標で亡くなった一人の生徒の遺族を訪ねてみようと思った。だが、すでに三十五年の歳月が流れている。ご両親は健在でおられるのか、健在だとして「何をいまさら」とけげんな顔をされてしまいか。不安を胸に家を探し歩いた。

故・望月文門君の家は、豊科町田沢の国道19号沿いにある旧家だった。八月初旬の暑い日、玄関の障子戸を引き、「お話を聞かせていただけませんか」と来意を告げると、文門君の父幸男さん(へい)、母知恵子さん(ちえこ)は最初戸惑いを隠せなかつたが「まあ、どうぞ」と招き入れてくれた。

あの日(昭和四十二年八月一日)、幸男さんは勤め先の会社にいた。西山(北アルプス)一帯が黒い雲に覆われているのを見て、山はすごい夕立だらうなと思ったという。帰宅すると、夕方のニュースで松本深志高校生の遭難と文門の訃報を知った近所の方々が詰め掛けていた。

息子が死んだとは全く信じられず、学校から連絡が入って校長室に飛び、その足で夜遅く上高地に上がつた。文門君は独標北側斜面の最上部で打たれた。もし

落雷が五秒遅ければ、文門君は頂上に立ち、そこにいた友達同様かつたはずだ。倒れたのち、人工呼吸を受ける写真が残つており、幸男さんは「即死とされたが、絶対に違う。結局天災ということで片付けられてしまった」「知恵子さんも「当時は何か言う勇気がなかった」と無念さを噛み締める。

二人は一ヶ月後の追悼登山に参加し、息子が打たれた岩稜に立ち、谷に向かつて名を呼び、邊にマジックで名前を記して來た。

「(名前を)探したんですが、見当たりませんでした」と伝えると、「そうですか。もう一回登りたいと願いつつ、かないませんでした」。幸男さんの目が赤かった。

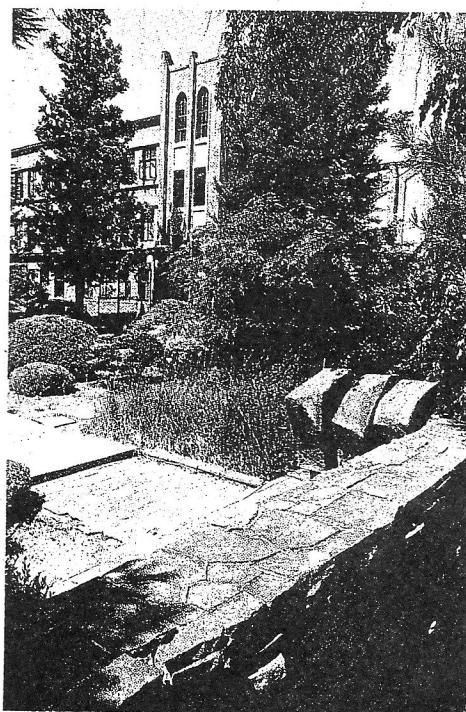
突然長男を失った望月家の三十五年は、苦闘の歳月だったようだ。「夫婦は慰め合えもできるが、兄を亡くした弟はそうはいかなかつた。家もまた崩壊するんです」と幸男さん。知恵子さんは「悲しみを乗り越えるのは大変なこと。他人にはわかつてもらえないです」と話した。

「忘れないでいてくれる方がおられる」と、あの子も浮かばれます」と言葉を掛けていただき、望月家

「橋の設計がしたいと夢を話してくれたことがあります。『お兄ちゃんはいつまでも年取らなくていいね』と会話しています」

「父親の守久さんは一年前に亡くなり、母和子さんとほお会いできなかつた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)



11人の故人名を刻み、前庭東側にある大きな「西穂遭難記念」の碑

を辞した。庭に出ると、サルスベリの花が夏の日盛りの陽を浴びてまぶしかつた。

西穂高町の商店街通りに面した故・嶋田利

夫君の家では妹の恭子さん(ごんこさん)があの日、西山に不吉な黒い雲があつたと記憶してい

た。「大好きなお兄ちゃん」を失つた悲しみは深く、「年月が悲しみを癒やしてくれなんとうそですね」と細い声で言つて涙をぬぐつた。

夢の中でも我が子に会いたい

故・折井博親君の母・富子さん(べ)は、松本市埋橋一の若ち着いた風情の家で静かに暮らしていた。坪庭と池が眺められる座敷で、「あの日は下(街部)もすごい雷雨でした」と、三十五年前の西穂高岳独標の落雷遭難当日を振り返り、話は一ヶ月後に行われた追悼登山に及んだ。

博親君、田村洋一君、片桐進君の三人は長野県側の谷に二百㍍転落、遺体の発見収容が翌日の夜までずれ込んで、深夜ようやく松本深志高校に運ばれた。遺品の確認どうではなかつた。

「いまさらどうなるものでもありませんし、引率の先生との間に何の会話が生まれました。でも、それでも、ああ、先生が来てくれたと思えば、それだけで心が安らぐんですね。悲しみに打ちひしがれたまま、遺族は年とともに消えていきますよ」

鬼氣迫るものがあり、追悼文集『独標に祈る』に載る、当時の千鶴さんの長詩「狂った母は、鬼子母神になりました。母は吾が子と同じ年頃の子を食べたりなりました。」などの凄まじい文言が頭をよぎつた。故・片桐進君の母・やすみさんは「とても親孝行な、面白い子でした。夢の中で会

西穂独標への道⑥

本山に及んだ。「あの日は下(街部)もすごい雷雨でした」と、三十五年前の西穂高岳独標の落雷遭難当日を振り返り、話は一ヶ月後に行われた追悼登山に及んだ。

博親君、田村洋一君、片桐進君の三人は長野県側の谷に二百㍍転落、遺体の発見収容が翌日の夜までずれ込んで、深夜ようやく松本深志高校に運ばれた。遺品の確認どうではなかつた。

「見せていただけますか」とお願いする

と、富子さんは「久しぶりに開けます」と言って、親市さん、博親君の遺影が並ぶ仏壇の引き出しから箱を取り出し、紐を解いた。中に緑色のナップザック、ぽろぼの妻わら帽子、落雷融痕の残る革ベルトと腕時計、

「いいと毎晩思うんですけど、一度も出でていません。成仏したということです。でも、もうじき会えるんじゃないかと思っています」と、はつと/or>するようなことを言わされた。

故・堀江成幸君の母・久美乃さん(せ)は「『独標に祈る』は押し入れの奥に閉まってあります。怖くて見られないんですけど、つらい胸のうちを明かされた。すでに両親とも亡くなり、空き家となつた家が三軒。夏草が生い茂り、玄関先まで入って行けない家もあった。

遺族たちの心は癒やされておらず、先生た

ちへの強い思いをたたかれていたことを知つた。時代の流れに取り残されてしまった無人の家を見たつけ、言い知れぬ大きな衝撃を受けた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回は西穂独標への道最終回)

『深志高の強い決意が読み取れる
『独標に祈る』』と事故調査報告書



重い悲しみと祈りはるかな道

松本深志高校一学期終業式後の一年生同
ホームルームで、学年主任の駒村尚子教諭
(五)は、三十五年前の西穂高岳独標落雷遭難
事故について話した。

「私はあのとき、君たちと同じ深志高校の一
年生でした」と切り出し、「何より大切な
のは一人ひとりの命です。やるべきことをし
っかりやって、元気で夏休み後にまた会お
う」と呼びかけた。そして歌を独唱した。
「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」。落雷遭難
で亡くなつた一年生十一人への鎮魂歌だ。
「天地も碎くるばかり／雷のとどろく穂
高／岩こそその高嶺より／雷に焼かれ擊た
れて／天翔り給ひし／君らが御靈…」
詩は袖山富吉教諭(当時)が呻吟の末に作
つた。その様子は「きびしい、おそろしいほ
どの表情で、遠くを呼びかけるように目をあ
げ、深くうなずいて書き」続けた。同僚教
諭が記している。

作曲をOBの田嶋大志郎さん(当時は東京
芸大学生)に依頼。田嶋さんは五日間、寝食
を忘れてピアノに向かった。完成後、音楽部
の生徒たちは猛練習し、全校練習を経て、事
故から十日後、県営体育館で営まれた学校葬
で見事に合唱されたのだった。

駒村教諭は当時音楽部だったことから、歌
は譜じていた。昨年四月、母校に赴任し、八

月には追悼登山で初めて独標に登った。「思った以上の廣く、先輩たちも来られていて、とても辛かったです。でも長年の宿題を果たしたような気持ちになりました」

この駒村教諭の歌声を藤本光世校長が片隅で聴いていた。「こういうメロディーだったのか」と感動し、八月一日の追悼式(学校慰靈碑前)に間に合わせるべく、音楽室に通つて音楽教諭にピアノを弾いてもらい、転調のある難しい曲を一生懸命マスターした。

追悼式で藤本校長は遺族や参列者を前に歌つた。歌い出すと、覚えている人が何人かいて小さな合唱になつた。

遺族や当事者の癒されない悲しみと苦し
みのなかにあって、遺族の積年の思いを和ら
げたのが、藤本校長の見舞いと読経であった
ことを知った。校長は昨年夏、独標追悼登山
から下山後、当地在住の遺族金眞の家を訪ね
歩いていた。

二学期始業式。校長講話で藤本校長は一人
の遺族からの手紙「神様は永い年月をかけて
平等に苦難を下さり、仏さまは慈悲を下さつ
た。歌い出すと、覚えている人が何人かい
て小さな合唱になつた。

この言葉は人生の戒めとも苦難を乗り越え
る勇気とも受け取れる、と藤本校長は全校生
徒たちに語った。

文・赤羽廣男／写真・山田毅
(次回はカジカの里)

松本深志高校の学校登山 昭和四十二(一九六七)年八月一日、西穂高岳独標での落雷遭難事故以来三十五年、深志高校は山岳部の登山を除いて、学校集団登山を一切行つていな。『遭難事故報告書』では冒頭「われわれは、終生、より安全な学校登山の姿を、雷災の実相を追い究めて行きたいと、深深く念願している」と記し、その悔恨と決意のほどをうかがわせる。

遙かなる西穂高岳

新村小百合にとって西穂高岳独標は遙かに遠い場所であった。それは距離のみならず、心情面においても。ところが、平成九年初夏、専門学校の学生たちを連れて上高地に行き、小梨平から西穂高岳の鋭利な山稜を眺めているうちに、「あそこに登らなければいけない」という思いが、入道雲のごとくわき上がってきた。本当に突然だった。どこの山にも登ったことのない自分が、なぜそうした衝動に突き動かされたのか、いまでもうまく説明できない。

上高地を下りると即ち、松本深志高校に電話を入れた。独標に登る計画があるのか、全ての初心者をしており、加わっていとの返答だった。昭和四十二(一九六七年八月一日、深志高校二年生の一行四十六人(うち教師五人)が、西

穂高岳登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜で落雷に遭い、十一人の生徒が死亡する未曾有の大惨事が起きた。慰靈登山は命日に学校関係者が人知れずおこなっていた。

小百合の初めての独標は霧に包まれて沈黙なものとなつた。一歩また一步近づくにつれ、先生たちは押し黙り、荒い呼吸音だけが聞こえた。鳥肌立つ全身の恐怖を感じながら這い上がり、「ああ、ここで」と思った瞬間、泣けてしまつた。

三十五年前のあの日、小百合はアニス部の夏合宿で学校に泊まり込んでいた。「山の事故で誰か亡くなつたそう

よ。びっくりして校長室に走り、テレビのニュースを固唾を飲んで待ち、報じられる度、「死」が一人、五人、七人と増えていくのにショックを受けた。夏合宿と日程が重なるなければ、自分もおそらく独標に登つていた。

深夜帰宅すると、西の空で雷鳴があつた。事故以来、雷が怖くて仕方なかつたが、その夜の雷は不思議と懐かしかつた。「帰つて来てくれたんだ…」

小百合は母が戦後間もなく創設したタイピスト学校を丸の内ビジネス専門学校に発展させ、校長の重責を担いつつ、昼夜授業を受け持つ。学生たちは「いま

講堂にしただけで、慰靈行事の形は取らなかつた。小百合はあいさつを「私たちにはこれからできること、せねばならないことがまだたくさんあります。いい年を重ね、明日を見つめて生きゆきましょう」と前向きに締めくくつた。

小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。文中・敬称略、日曜日掲載(赤羽 康男)。

の時間を使つて話す。昨年二人の親友をがんと脳腫瘍で相次いで失い、重い意味を込めて言うのだが、若者に伝えるのは難しい。遭難事故当时を振り返れば、自明の理である。

被雷の悲しみ 35年後の今も

あれに登らなければ、突然の衝動

「この年になつてやつと、遺族の無念さ、辛さ、引率した先生の後悔や苦楚がわかるよう気がします。それを全部含めた悲しみを私たち同期はみんな持つていると思うんです」小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。

— 52 —

編集を終えて

皆さんに書いていただいて本当によかった。それが今の実感である。

書けるときが来たのだとも思う。20年目、30年目と21回卒の年次会を持ってきたけれど、西穂高岳独標への登山という話は、今回がはじめてである。ようやく西穂に関わる私たち共有のトラウマがほぐれてきているのではないか。

書いていただいた文章から少し引いてみる。

17～18歳の少年から青年期に移る世代には、精神的に微妙に影響していた。…

私も心には何か得体の知れないどんよりとした重苦しさを感じていた。

事故の生き残りとして個人的には、喪失感と虚無感を心のどこかに抱き続けています…

8月1日は自分自身の「生」を見つめる日でもある。

こうした気分の根拠は次のような言葉に表されている。

「なぜ私が生き残ってしまったのか」

こうした想念は、あの時山上にいたもののみでなく、翌日登山に向かうはずだったものや、行きたいと思っていたけれどクラブ活動などの事情で参加を断念した者たちをも含んで、皆が同様に共有するものである。だから、次のような情動につながる。

独標では自然に涙が出てきた。

カタルシスを経て、次のような言葉が発せられる。

長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。

4年前から独標に登ることにした。昔のことを思い出したり、今年はこんなことがあった、来年はこうしよう、などいろいろなことを考えながら、一步一歩独標への道をたどることで、11人の仲間との対話を楽しんでいるこのごろの私である。

みんなで登ることができたことが、こうした感情の共有を実現した。そしてそのことは、これから我々の生にとって、さらにしっかりした足がかりを作ってくれたように思う。卒業40年は、まだまだ我々にとって、中間点である。

写真は、百瀬修平さん、白木建太郎さん他からいただいた。新聞資料は、小林俊樹先生、大西健文さん、伊藤芳郎さんから提供していただいた。二木計臣さんの遺稿を提供していただき、また、改めて綴っていただいた小林俊樹先生、小松芳郎先生に感謝し、編集を終えたい。

(文責 鈴岡潤一)

42年目の独標 2009

2009年10月10日 発行

発行者 松本深志21回生卒業40周年記念事業実行委員会
代表者 上條 誠二

編集者

鈴岡潤一

松本深志高校の一年生九人が職場見学に訪れた。働くことの意味を考え、進路決定や大学選択の参考にする学習活動だ。最新鋭の新闘製作システムに驚いた様子だった▼情報はどう入手するか、にも強い関心があつたらしい。事件の多くは、関係機関の発表や読者からの情報提供による。西穂独標落雷の悲劇は、警察から報道各社に第一報がもたらされた。三十九年前の八月一日だった▼学校は豊近で落雷のため五人が死亡した、いや後からの報告だと十人が負傷したとの報があつたが、生徒が登つたかどうか」。新聞社は現地に大勢の記者を送り込んだ▼集団登山中の二年生十一人が亡く

みすず野

なった。母校にある慰靈モニュメントの前で追悼式が行われた。坂巻道弘校長は一人ひとりの名前を読み上げ、「現任校長としておわびする。明るく安全な学校づくりを誓う」と述べた▼練習中の運動部員たちが花を手向け、補習中の在校生は授業を中断して黙とうをさげた。追悼登山も続いている。校史百三十年に刻まれた悲しみと祈りはこうして受け継がれる。

松本市の自営業内川清志さんは五十六歳になる。北アルプス西穂高岳の独標を思つ。遠い過去の出来事なのに、五感に擦り込まれた体験と記憶は鮮明によみがえる▼山頂で弁当を広げると、いきなり雨が降りだした。西穂山荘に避難しようと下山を開始した。遠くで雷鳴が聞こえた。遠くで雷鳴が聞こえた。独標の急斜面にかかり、四つんばいで登つて倒れていた。背中越しに名前を呼んだが返事はない。「丈夫か」。叫び声が聞こえた。見上げる

みすず野

た電撃は、右肩と右足に抜けていた。用を足して遅れ、内川さんを追い抜いて独標の上りを急いだ人が、雷に打たれて亡くなつた。生死と人生を分けたあの日。「運があったのかな」と思えるようになつた▼一九六七年(昭和四十二)年八月一日だった。集団登山中の松本深志高校の二年生と教諭が独標で被雷し、生徒十人が死亡した。山岳遭難史に残る落雷事故からちよつと四十年になる。

みすず野

四十一年前の音風景は「葬送行進曲」で始まつた。西穂落雷高校の学校葬である。実は録音テープが残されていた。夏の記憶がよみがえる▼「心むなしさの果て、悲しみの極みに耐えて」。式辞に立った当時の赤羽誠校長はこう切りだした。亡くなつた教え子一人ひとりの名前を呼んだ。合唱「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」を挙み、生徒の弔辞へと移る▼親しみを込めた呼び捨てで遺影に向かつた友がいた。遠足の思い出をすり泣きながら語る仲間もいた。夢や学術の理想を語り明かした夜があった。「遠い世界に行つても心の中に生き続ける」。時空を経ても変わらない▼「おまえ

の分まで立派な花を咲かせてみせる」「悲しみを無駄にしない。君の分まで頑張る。僕たちはきっとやる」「おまえが果たせなかつた夢をおれが果たす」。涙の誓いは、力ミナリ学年が抱く共通の思いである▼昭和四十二年八月一日だった。集団登山中の深志高二年生と教諭が西穂・独標で被雷し、生徒一人が死亡した。山岳遭難史に刻まれた。命日の祈りと追悼登山が引き継がれている。

みすず野

鈴岡潤一さんは、母校の松本深志高で世界史を教える。あの夏の日、背中のほぼ真ん中に雷撃を受けた。右足の親指のつめが変形している。雷が抜けていつたあとである▼北ア・西穂山荘への下山途中、独標の上りにさしかかったところで氣を失う。背中に入った雨の冷たさで意識が戻つた。右耳がちぎれそうになつていて。後ろ向きに倒れた際、岩の角で切れたらしい。とにかく寒かつた▼若き日の迷路の先にあつた急斜面で、運命が分かれた。岡さんは助かり、すぐ後ろを歩いていた親友は亡くなつた。「人生を拾つた」「生かしてもらつている」。当事者である事実を語り始めた時間であった▼山岳部の

顧問を務める。在校生たちを引率して今年も向かう追悼登山に、大学2年生になった次男が同行する。長男も父親と同じ高2になつた年に登つていふ。子どもたちに、寡黙な男親の背中はどう映つていただろう▼昭和42年8月1日だった。集団登山中の深志高2年生と教諭が独標で被雷し、生徒一人が死亡した。わが国山岳遭難史に悲しく刻印された「カミナリ学年」の卒業から40年になる。

北アルプス幻想行

西穂高岳独標^{どっぴょう}。この悲しい響きを持つ岩峰に立ちたい。

立つてどうなるものでもないが、立つことによって何か体感でき、当事者や関係者の消えることのない深い悲しみの淵に、わずかでも寄り添え、山というものの、人生というものを感じる契機になればいい。そんな想定とうか、強い内的衝動に突き動かされていた。

三十五年前になる。昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の集団登山の一一行四十六人(うち教師五人)が、北アルプス西穂高岳(二、九〇九メートル)登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜を登攀中、落雷に遭い、十一人の生徒が死亡、十三人が重軽傷を負った。

これより半世紀以上前の大正二(一九一三)年八月二十六日、中央アルプス駒ヶ岳で中箕輪尋常小学校(現・箕輪中学校)の生徒ら三十七人が台風に遭遇し、生徒十人と赤羽校長の合わせて十一人が死亡しているが、奇しくも「死者十一」という数字が一致する。

大惨事に遭った松本深志高校生たちはいま、五十二歳。社会の中堅を担い、人生花盛りの時節を迎えていて不思議はない。生還した彼、彼女らはどんな人生を歩んでいるのだろう、また引率した教師たちは、遺族は…。遭難から一年、同校が発行した分厚い追悼文集『独標に祈る』をリュックにしのばせ、上高地から一行が登ったと天体同じ登山道をたどった。



3代目・村上文俊さんが登山客と応対する

針葉樹林帯の急登が続き、苦しかった。休む度に冷える体にまた汗がどっと噴き出してきた。西穂山荘前の斜面にお花畠があり、ハクサンフウロの美しい花に疲れを癒された。西穂山荘は平成二年秋、火災で全焼してしまい、四年に完成したログハウス風の山荘。専務の村上文俊さん(三回)がやさしい笑顔で迎えてくれた。

ロビーの頭上に、在りし日の村上守さん(初代)が愛犬とともに写る大きなパネルが掲げられてあった。少年時代、上条嘉蔵次に連れられて初めて上高地に入り、やがて山小屋建設の夢を抱き、労苦の末に実現、名ガイドと称された「西穂のおやじさん」だ。

松本深志高校の事故発生の際も、従業員を現場に急行させ、登山者に協力を請い、自らも背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、おつかねする生徒らを励まし続けた。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

文俊さんが生まれる一ヶ月前の出来事。「山は人の心を変える力あり」が口癖だった守さんの精神は、「二代目・健一さん(三)、孫の文俊さんに受け継がれている。

岐阜県側に新穂高ロープウェイ

が開設されて以来、登山者のほかに小さな子供連れや年配者が増えた。「安全が何よりです」と語る文俊さん。泊った日の夕、けが人も背負子を背に独標に駆けつけた。遺体の収容やけが人の救出にリーダーシップを發揮、暮れる危険な状況下での的確な判断をする姿に、守さんの「幻影」を見た。

現場に駆けつけた「おやじさん」

朝日に染まる峰 険しく美しく

山の朝は早い。

西穂山荘で用意してもらった朝食のおにぎりをリュックに詰め、日の出前の薄暗い登山道を登る。尾根道に出で、高度を稼ぐ。鳥が切れる。背後の焼岳の山頂が朝焼けに輝き出した。

「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を「独標だ、独標に登るんだ」頭の中を

若い単独行の女性が、気ばかりせいて足が空回りするこの不格好な中年男を追いかけて行く。同僚のカスマラマンが重い機材を背負つてあえぎあえぎ登って来る。

独標が近づいた。岩峰というより、四角い大きな岩の塊だ。

直下の鞍部で一息入れ、氣を引き締めて岩場に取り付いた。途中で足元の視線を横に移すと、ルート右わきに小さな「慰靈の碑」が立っていた。下山後、遺族を訪ね歩いて知ったのだが、この慰靈碑は松本深志高校や遺族会が建立したのではなく、命を落した十人の中の一人、嶋田利夫君の穗高中時代の同級生たちが、重い石を担ぎ上げ、据えたものであつた。碑前に跪き、手を合わせ、写真に収めた。

午前五時三十五分、独標の頂(二、七〇)一

がに立つた。
そこは思ったより狭く、中高年のツアーデすでに満杯状態だった。ちょうど朝日が前穂高岳の峻厳な峰々から昇って、岩塊を神々しいまでに染め上げた。

見事というほかない眺めだった。北は西

穂、ジャンダルム、奥穂に続く険しい岩稜、西は美しい姿勢の笠ヶ岳、遠く白山、南は焼岳、乗鞍、東は遥か富士山と甲斐駒ヶ岳、北岳、仙丈、塙観、赤石、聖岳といった三〇〇以級の南アルプス連山、手前に中央アル

バス、左手に八ヶ岳…。

三十五年前、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は午前十時四十五分にここに着き、早めの昼食を取っている。このとき、西穂頂上までははつきり見え、天候急変の兆は感じられなかった。

ただ、西穂山荘主の村上守さん(故人)は、早朝起床して笠ヶ岳方向を眺めたとき、「赤いキレギリになつた雲を見て『今日は危ないぞ』と思った」という。この雲が出ると

必ず雷雨になるわけではないが、従業員に注意を促している。

独標から西穂高岳山頂までは人のすれ違いにも神経を使つゝせ尾根が続く。しかも大小の鋭い岩稜が連なり、両手両足でバランスを取つてよじり、足場を探して這いつづくよう

下る。

一步間違えば谷底に墜つ逆さま。緊張の連続だが、これぞ登山の醍醐味と言えば、そうである。

文・赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)



登山者でにぎわう西穂独標

一瞬の雷光 11人の若い命散る

三十五年前の八月一日、松本深志高校二年生の一一行四十六人(うち教師五人)は、西穂高岳(二、九〇九m)に登頂した。しかし、山頂はガスに覆われて全く眺望が利かず、午後四十分ころ、鈴木重春教諭(リーダー)を先頭に下山を始める。

下山と言つても一気に下れる山ではない。

やせ尾根が続き、足場を確保しながらはいざる岩壁もあって、相当な緊張を強いられる。

一行が下山開始するころ雨が降り出し、岩は濡れて一層の注意が必要だった。大きなピクを下り切ったところ、豪雨がやって来た。大きな雹が交じり、みるみるうちに足元の岩のくぼみにたまつた。

「私は本当に『しまったな』という思いに胸を衝かれていた。この天候はまさしく雷雨である。私は『どうしようか』と慌しく思ひめぐらした。雹混じの雨は烈しく、飛騨側から吹き上げる風は冷く強い」(西穂遭難追悼文集『独標に祈る』より)。

「私」とほ錦木教諭である。この稜線上で待避か、稜線を避けて急斜面で待避か、独標を越えてハイマツ地帯に逃げ込むか、三つに一つ。だがどれも危険を伴う。

「独標を越える以外ない」

錦木教諭は腹を決め、すぐ後ろに続く書始めた女生徒を励ましつつ、先を急いだ。稻妻と雷鳴が迫ってきた。そして一行が独標越えしているまさにそのとき(午後一時四十分ころ)音もなく火が吹いて、雷が落ちる。

鈴木教諭はすでに独標を越え、九人の生徒とともに南側斜面にいた。その瞬間、頂上すぐ上に光を見、鼻に強烈な衝撃を受けて体が宙に浮かび、仰向けに沈んでいく。「ああやつぱり」の思いと、「終わったな」という思

いが交錯した。

落雷の瞬間、独標頂上に八人、頂上を目指す北側斜面に二十三人、鞍部から後ろにはさらに五人がいたのだが、死者、重軽傷者は鈴木教諭以外、すべて北側斜面(長さ二六・六m)に足を掛けた二十三人だった。

頂上に立っていた者が被害に遭わらず、斜面を登っていた者に被害が集中した。不思議なことだ。これは落雷放電が雨を媒介にして、抵抗の少ない岩の間に伝わったとの説がある。(『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』より)

懸命に目を瞑らしもの、三十五年前の痕跡がありようはずもなく、岩間に咲く清楚なイワツメグサが風にかすかに揺れていた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)

西穂独標の落雷遭難 昭和四十二(一九六七)年八月一日午後一時四十分ころ、松本深志高校二年生の一一行四十六人が西穂高岳からの下山途中、独標で被雷し、男学生十人が電撃死もしくは電撃ショックによる転落死した。重軽傷者も十三人を数え、落雷遭難史上、空前の大惨事となつた。救助活動は西穂山荘、東邦大学医学部、学校の関係者、警察、自衛隊レンジャーなどがおこなつた。

西穂独標への道 ③

「やれやれ、独標さえ越えてしまえば」の引率教師の願いもむなしく、落雷は西穂高岳独標(二、七〇メートル頂上付近から火を噴き、あたかも濡れ雑巾でシャツとたたいてごく北側斜面を貫通した。

松本深志高校二年生の一一行四十六人のうち、二十三人が斜面を登っており、直撃を受けて、ある者はその場に仰向けに倒れ、ある者は長野県側にまたある者は岐阜県側に飛ばされて、断崖を百㍍二百㍍転げ落ちた。

一行の最後尾にいた五人(うち教師一人)は、まだ北側斜面には至らず、鞍部に向かって対面を下降中だった。

その一人、上条誠二さん(当時松本市中央二年)は、落雷の瞬間、前に出して、右足に打たれたような衝撃が走り、痺れを覚えた。びっくりして視線を上げると、北側斜面を登攀中の一人が長野県(左)側に両手を上げて後ろ向きに落ち、岐阜県(右)側にも岩場を転がるようにならへて落していくのが見えた。

「先生、人が落ちました」と叫んだ気もある。先生の指示でその場に立っていたが、雷と電気が烈しく、体が冷え切って凍死ぬのではないかと思つた。長野県側に十㍍ほど

胸奥に刻む それぞれの記憶

落ちた田代宗広君が「血が止まらない」と言つたので、そこまで下り、借りた手ぬぐいで縛つたが、うまく縛れなかつた。

現場は修羅場の様相を呈していたにちがいない。「やつてしまつた」と慌てふためく先生をよそに、生徒たちは半ば茫然とし、打ちひしがれていたようだ。

かなりの時間がたち、西穂山荘からの救援隊が到着した。上条さんは重傷の田近恵寿君がザイル確保で稜線まで引き上げられ、背負子で運ばれるのを手伝い、すでに暗くなつた足元を懐中電灯で照らしながら、山莊に向かつて歩いた。

「独標に上がる途中、何か掛けたある人がいた。そのときまで死者が出ているとは夢にも思わなかつた。ショックが大きかつたせいか、あまり記憶がないんです」と語り、小さく首を振つた。



当事者、同級生たちの思いに温度差はある。だが、そうであつても西穂高岳のある岩稜が、彼ら一人ひとりのその後の人生に重厚な存在感をもたらしたのは間違いない。

文 赤羽康男／写真・山田毅
(次回も西穂高岳への道)

がると、そこに顔中血だらけの田近君が倒れていて、田近君は頭をもたげ、「誰?」と聞いてきた。二人は救助隊が来るまでそこにじつとしていたが、上では横内教諭が二人の居場所に落ちそながつた。

「空中を舞つた」上島さんは九死に一生を得、救助隊に導かれ、独標を巻くようにして下りた。現場の惨状を見ていたため、恥ましい体験として残らなかつたせいか、のちに本格的な山登りにめり込んだ。

この上条さんに転落を目撃された一人はおそらく、上島正吾さん(当時諏訪郡富士見町)である。上島さんは被雷直後、岐阜県側の急斜面を百㍍落つこちた。気がつくと仰向けて頭は合側にあつた。腰を動かして体を横向きにし、這い上

事故調査報告 松本深志高校は西穂高岳遭難事故一年後の昭和四十三(一九六八年)八月一日、追悼文集『独標に祈る』を発行。翌年三月には詳細な遭難記録とともに、登山計画や行動上の問題点を洗い出し、気象専門家らの寄稿も加えた『西穂高岳落雷遭難事故調査報告書』を刊行した。「集団登山として安全を確保するためには、あの天候の中で西穂高岳稜線を行動してはいけなかつた」と明記、「この悲しい事故の教訓をよく学びとり、生かして行くことが十一名の諸君に報いる道」と刻している。

消えない亡くした悲しみ

西穂高岳独標で亡くなった一人の生徒の遺族を訪ねてみようと思った。だが、すでに三十五年の歳月が流れている。ご両親は健在でおられるのか、健在だとして「何をいまさら」とけげんな顔をされてしまいか。不安を胸に家を探し歩いた。

故・望月文門君の家は、豊科町田沢の国道19号沿いにある旧家だった。八月初旬の暑い日、玄関の障子戸を引き、「お話を聞かせていただけませんか」と来意を告げると、文門君の父幸男さん(へい)、母知恵子さん(ちえこ)は最初戸惑いを隠せなかつたが、「まあ、どうぞ」と招き入れてくれた。

あの日(昭和四十二年八月一日)、幸男さんは勤め先の会社にいた。西山(北アルプス)一帯が黒い雲に覆われているのを見て、山はすごい夕立だらうなと思ったという。帰宅すると、夕方のニュースで松本深志高校生の遭難と文門の訃報を知った近所の方々が詰め掛けていた。

息子が死んだとは全く信じられず、学校から連絡が入って校長室に飛び、その足で夜遅く上高地に上がつた。文門君は独標北側斜面の最上部で打たれた。もし

落雷が五秒遅ければ、文門君は頂上に立ち、そこにいた友達同様かつたはずだ。倒れたのち、人工呼吸を受ける写真が残つており、幸男さんは「即死とされたが、絶対に違う。結局天災ということで片付けられてしまった」。知恵子さんも「当時は何か言う勇気がなかった」と無念さを噛み締める。

二人は一ヶ月後の追悼登山に参加し、息子が打たれた岩稜に立ち、谷に向かつて名を呼び、邊にマジックで名前を記して來た。

「(名前を)探したんですが、見当たりませんでした」と伝えると、「そうですか。もう一回登りました」と願いつつ、かないませんでした。幸男さんの目が赤かった。

突然長男を失った望月家の三十五年は、苦闘の歳月だったようだ。「夫婦は慰め合えもできるが、兄を亡くした弟はそうはいなかつた。家もまた崩壊するんです」と幸男さん。知恵子さんは「悲しみを乗り越えるのは大変なこと。他人にはわかつてもらえないです」と話した。

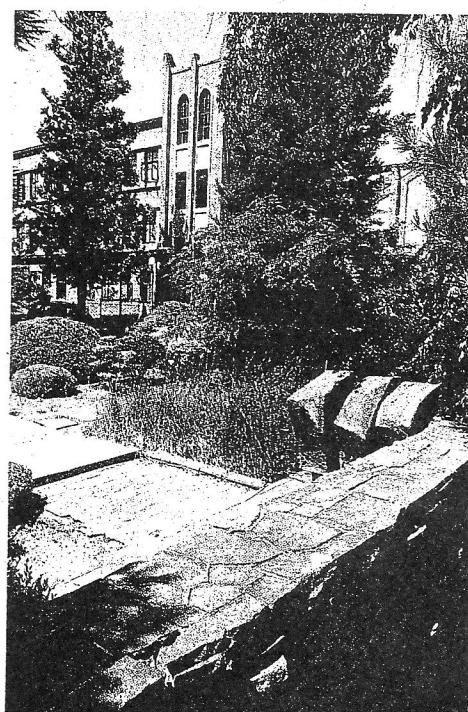
「忘れないでいてくれる方がおられる」と、あの子も浮かばれます」と言葉を掛けていただき、望月家を辞した。庭に出ると、サルスベリの花が夏の日盛りの陽を浴びてまぶしかつた。

穂高町の商店街通りに面した故・嶋田利夫君の家では妹の恭子さん(ごんこ)があの日、西山に不吉な黒い雲があったと記憶している。「大好きなお兄ちゃん」を失った悲しみは深く、「年月が悲しみを癒やしてくれなんとうそですね」と細い声で言つて涙をぬぐつた。

「橋の設計がしたいと夢を話してくれたことがあります。『お兄ちゃんはいつまでも年取らなくていいね』と会話しています」

父親の守久さんは一年前に亡くなり、母和子さんとほお会いできなかつた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回も西穂独標への道)



11人の故人名を刻み、前庭東側にある大きな「西穂遭難記念」の碑

夢の中でも我が子に会いたい

故・折井博親君の母・富子さん(べ)は、松本市埋橋一の若ち着いた風情の家で静かに暮らしていた。坪庭と池が眺められる座敷で、「あの日は下(街部)もすごい雷雨でした」と、三十五年前の西穂高岳独標の落雷遭難当日を振り返り、話は一ヶ月後に行われた追悼登山に及んだ。

博親君、田村洋一君、片桐進君の三人は長野県側の谷に二百㍍転落、遺体の発見収容が翌日の夜までずれ込んで、深夜ようやく松本深志高校に運ばれた。遺品の確認どうではなかつた。

「いまさらどうなるものでもありませんし、引率の先生との間に何の会話が生まれました。でも、それでも、ああ、先生が来てくれたと思えば、それだけで心が安らぐんですね。悲しみに打ちひしがれたまま、遺族は年とともに消えていきますよ」

鬼氣迫るものがあり、追悼文集『独標に祈る』に載る、当時の千鶴さんの長詩「狂った母は、鬼子母神になりました。母は吾が子と同じ年頃の子を食べたりなりました。」などの凄まじい文言が頭をよぎつた。故・片桐進君の母・やすみさんは「とても親孝行な、面白い子でした。夢の中で会

西穂独標への道⑥

本山に及んだ。「あの日は下(街部)もすごい雷雨でした」と、三十五年前の西穂高岳独標の落雷遭難当日を振り返り、話は一ヶ月後に行われた追悼登山に及んだ。

博親君、田村洋一君、片桐進君の三人は長野県側の谷に二百㍍転落、遺体の発見収容が翌日の夜までずれ込んで、深夜ようやく松本深志高校に運ばれた。遺品の確認どうではなかつた。

「見せていただけますか」とお願いする

と、富子さんは「久しぶりに開けます」と言って、親市さん、博親君の遺影が並ぶ仏壇の引き出しから箱を取り出し、紐を解いた。中には緑色のナップザック、ぽろぼの妻わら帽子、落雷融痕の残る革ベルトと腕時計、

「いいと毎晩思うんですけど、一度も出でていません。成仏したということです。でも、もうじき会えるんじゃないかと思っています」と、はつと/or>するようなことを言わされた。

故・堀江成幸君の母・久美乃さん(せ)は「『独標に祈る』は押し入れの奥に閉まってあります。怖くて見られないんですけど、つらい胸のうちを明かされた。すでに両親とも亡くなり、空き家となつた家が三軒。夏草が生い茂り、玄関先まで入って行けない家もあった。

遺族たちの心は癒やされておらず、先生た

ちへの強い思いをたたかれていたことを知つた。時代の流れに取り残されてしまった無人の家を見たつけ、言い知れぬ大きな衝撃を受けた。

文・赤羽康男/写真・山田毅
(次回は西穂独標への道最終回)

『深志高の強い決意が読み取れる
『独標に祈る』』と事故調査報告書



重い悲しみと祈りはるかな道

松本深志高校一学期終業式後の一年生同
ホームルームで、学年主任の駒村尚子教諭
(五)は、三十五年前の西穂高岳独標落雷遭難
事故について話した。

「私はあのとき、君たちと同じ深志高校の一
年生でした」と切り出し、「何より大切な
のは一人ひとりの命です。やるべきことをし
っかりやって、元気で夏休み後にまた会お
う」と呼びかけた。そして歌を独唱した。
「穂高に逝きし若き御靈に捧ぐ」。落雷遭難
で亡くなつた一年生十一人への鎮魂歌だ。
「天地も碎くるばかり／雷のとどろく穂
高／岩じごしその高嶺より／雷に焼かれ擊た
れて／天翔り給ひし／君らが御靈…」
詩は袖山富吉教諭(当時)が呻吟の末に作
つた。その様子は「きびしい、おそろしいほ
どの表情で、遠くを呼びかけるように目をあ
げ、深くうなずいて書き」続けた。同僚教
諭が記している。

作曲をOBの田嶋大志郎さん(当時は東京
芸大学生)に依頼。田嶋さんは五日間、寝食
を忘れてピアノに向かった。完成後、音楽部
の生徒たちは猛練習し、全校練習を経て、事
故から十日後、県営体育館で営まれた学校葬
で見事に合唱されたのだった。

駒村教諭は当時音楽部だったことから、歌
は譜じていた。昨年四月、母校に赴任し、八

月には追悼登山で初めて独標に登った。「思った以上の廣く、先輩たちも来られていて、とても辛かったです。でも長年の宿題を果たしたような気持ちになりました」

この駒村教諭の歌声を藤本光世校長が片隅で聴いていた。「こういうメロディーだったのか」と感動し、八月一日の追悼式(学校慰靈碑前)に間に合わせるべく、音楽室に通つて音楽教諭にピアノを弾いてもらい、転調の

ある難しい曲を一生懸命マスターした。

追悼式で藤本校長は遺族や参列者を前に歌つた。歌い出すと、覚えている人が何人かいて小さな合唱になつた。

遺族や当事者の癒されない悲しみと苦し
みのなかにあって、遺族の積年の思いを和ら
げたのが、藤本校長の見舞いと読経であった
ことを知った。校長は昨年夏、独標追悼登山
から下山後、当地在住の遺族金眞の家を訪ね
歩いていた。

二学期始業式。校長講話で藤本校長は一人
の遺族からの手紙「神様は永い年月をかけて
平等に苦難を下さり、仏さまは慈悲を下さつ
た。歌い出すと、覚えている人が何人かい
て小さな合唱になつた。

この言葉は人生の戒めとも苦難を乗り越え
る勇気とも受け取れる、と藤本校長は全校生
徒たちに語った。

文・赤羽廣男／写真・山田毅
(次回はカジカの里)

松本深志高校の学校登山 昭和四十二(一九六七)年八月一日、西穂高岳独標での落雷遭難事故以来三十五年、深志高校は山岳部の登山を除いて、学校集団登山を一切行つていな。『遭難事故報告書』では冒頭「われわれは、終生、より安全な学校登
山の姿を、雷災の実相を追い究めて行きたいと、深深く念願している」と記し、そ
の悔恨と決意のほどをうかがわせる。

遙かなる西穂高岳

新村小百合にとって西穂高岳独標は遙かに遠い場所であった。それは距離のみならず、心情面においても。ところが、平成九年初夏、専門学校の学生たちを連れて上高地に行き、小梨平から西穂高岳の鋭利な山稜を眺めているうちに、「あそこに登らなければいけない」という思いが、入道雲のごとくわき上がってきた。本当に突然だった。どこの山にも登ったことのない自分が、なぜそうした衝動に突き動かされたのか、いまでもうまく説明できない。

上高地を下りると即ち、松本深志高校に電話を入れた。独標に登る計画があるのか、全ての初心者をしており、加わっていとの返答だった。昭和四十二(一九六七年八月一日、深志高校二年生の一行四十六人(うち教師五人)が、西

穂高岳登頂の帰り、独標と呼ばれる岩稜で落雷に遭い、十一人の生徒が死亡する未曾有の大惨事が起きた。慰靈登山は命日に学校関係者が人知れずおこなっていた。

小百合の初めての独標は霧に包まれて沈黙なものとなつた。一歩また一步近づくにつれ、先生たちは押し黙り、荒い呼吸音だけが聞こえた。鳥肌立つ全身の恐怖を感じながら這い上がり、「ああ、ここで」と思った瞬間、泣けてしまつた。

三十五年前のあの日、小百合はアニス部の夏合宿で学校に泊まり込んでいた。「山の事故で誰か亡くなつたそう

よ。びっくりして校長室に走り、テレビのニュースを固唾を飲んで待ち、報じられる度、「死」が一人、五人、七人と増えていくのにショックを受けた。夏合宿と日程が重なるなければ、自分もおそらく独標に登つていた。

深夜帰宅すると、西の空で雷鳴があつた。事故以来、雷が怖くて仕方なかつたが、その夜の雷は不思議と懐かしかつた。「帰つて来てくれたんだ…」

小百合は母が戦後間もなく創設したタイピスト学校を丸の内ビジネス専門学校に発展させ、校長の重責を担いつつ、昼夜授業を受け持つ。学生たちは「いま

講堂にしただけで、慰靈行事の形は取らなかつた。小百合はあいさつを「私たちにはこれからできること、せねばならないことがまだたくさんあります。いい年を重ね、明日を見つめて生きゆきましょう」と前向きに締めくくつた。

小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。文中・敬称略、日曜日掲載(赤羽 康男)

の時間の大切にしないといふ。親友をがんと脳腫瘍で相次いで失い、重い意味を込めて言うのが、若者に伝えるのは難しい。遭難事故当時を振り返れば、自明の理である。

被雷の悲しみ 35年後の今も

あれに登らなければ突然の衝動

この年になつてやつと、遺族の無念さ、辛さ、引率した先生の後悔や苦楚がわかるよう気がします。それを全部含めた悲しみを私たち同

期はみんな持つてゐると思うんです」小百合は涙をこぼして少しほほ笑んだ。

てやつと、遺族の無念さ、辛さ、引率した先生の後悔や苦楚がわかるよう気がします。それを全部含めた悲しみを私たち同